方向

八

方向社
京都市西陣局下長者町通千本西入
1958年9月7日

目次

顧況雑記　一
潘岳の評價について　三九
『ゆるぎなき結婚』（マックス・ピカート）讀後　四五
「春風馬堤曲の解釋」讀後　六〇
幽眠　中夏歴代詩選譯之七　六三
敝箒　袁中郎私記三　七五
『平松集』訂正　一一四
『方向』八訂正　一二四

顧況雑記

原田憲雄

一、はじめに
二、白居易に対する影響
三、「聚角短歌」の解釈
四、伝記をめぐって
五、おわりに

一

中唐の詩人顧況が、元結とともに、白居易や元稹を中心とする詩派に対して、前駆的な役割を果したことは、こんにち、ほぼ定説となっている。

元結は　古文家として韓愈・柳宗元等にさきがけたこと、さらには、人民の痛苦を代弁する立場に立ったことから、ことに戦後、中国の文学史家の注目を浴びた。龍蘇「詩人元結」（一九五六年一月『文学遺産増刊』第二輯）、孫望『元次山年譜』（一九五七年二月　上海古典文学出版社）、湯筆民「元結和他的作品」（一九五七年四月『中山大学学報（社会科学）』六）などは、そのあらわれである。

顧況については、戦前に許瀚「顧況研究」（一九三三年一月　嶺南大学白治会『制風』七巻一期）があるほか　まだ、これといった研究も出ていないようである。

わたくしは、顧況の詩文と、新・旧『唐書』、『資治通鑑』、その他、歴代の詩話等に散見する、伝記　軼事・批評等を読んで、いくつかの疑問と臆見とを抱いた。あるいは許氏がすでに解決し、また問題かともおもうが、その研究をいまだ見えないでいる。とりあえず、以下に私見を記して、大方の示教を乞うこととする。

二

陸侃如・馮沅君『中国詩史』（一九五六年、北京作家出版社重印）は、第四　中晩唐詩の、章

一　導論に、白居易と元稹とについてのべたのち、元結・顧況にふれて、次のようにいう。

其他作風相近的詩人，年代在元白以前的有元結与顔況。元結的詩如二風詩十首，補樂府十首，系樂府十二首，部是字民間疾苦的，与杜陵行寺賊退示官作二首尤為杜甫所称賞。顔況的作品較多，他的上古之什補亡訓佑十三首中只『囝』一首較佳。

同じ篇の、章四　白居易及其他にも、相似た趣旨をややくわしくのべるが、顔況については、要するに、ごくわずかの、諷喩詩をのぞけば、とるに足りない、とするのである。『中國詩史』にいう「囝」なる作品は、次の通りである。なお、以下に引く顔況・白居易の詩は、通行本『全唐詩』によった。

囝、哀閩也。囝、音蹇。閩俗、呼子為囝。父為郎罷。

囝生閩方　閩吏得之　乃絶其陽　為臧為獲　致金滿屋　為髡為鉗　如視草木　天道無知　我罪其毒　神道無知　彼受其福　郎罷別囝　吾悔生汝　及汝既生　人物不辜　不從人言　果獲是苦　囝別郎罷　心摧血下　爾地絶天　及至黄泉　不得在郎罷前

この詩について明の胡震亨の『唐音癸籤』巻二十三、詩箋八に

此為唐閹官作也　唐宦官多出閩中小兒私割者　號私白　諸道每歲貢献之於朝　故当時号閩為中官区藪　備載唐書宦官伝　時中貴人初秉權作孽　況詩若憐之　亦若箴戒之　寓有微意在

という。さもあろうと思われる。

さて　顔況の「上古之什補亡訓佑」十三章は、長短の差はあっても、いずれも似たような形の詩である。白居易の新楽府が、題名の次に、題義を明す注をつける点、寓有微意在なる点、ともに顔況に学んだろうこと、ほとんど疑いを容れる余地がない。

両者に相違するところは次のような点であろう。

白居易の新楽府は、漢魏の民歌の形式はとっても、ことばは中唐の co to date であった。韻文としては、当時の俗家の耳にも、多分、抵抗の少なかった、五言を主とする句から成っている。意味もまた、聞いてただちに了解しうる。

これに反して、顔況の「上古之什補亡訓傳」は、詩経の形式を襲い、四言の句を主とし、ことばもまた、若古奇僻なものをまじえて、知識人でなければ、理解しがたい。もっとも、他の詩は、おおむね、俚耳に入りやすい、やさしいことばで作られている。白居易の詩の平易は、あるいはそこに学んだのであるかもしれない。

顔況の白居易に対する影響は、諷喩詩のみにとどまらない。もっと広く、深いように、思われる。

白居易に著しいことの一つに、詩中に date を書きこむことがある。date のみでなく、一体に数字をよみこんだものが多い。

皇帝嗣寶曆　元和三年冬　……　元年誅劉闢　一挙靖巴邛　二年戮李錡　不戰安江東（寄西）

元和歳在卯　六年春二月（青雪）

八年十二月　五日雪紛紛　……　迴觀村閭間　十室八九貧（村居苦寒）

一年十二月　毎月有常令（贈友五首）

一章三遍読　一句十回吟　珍重八十字　字字化為金（初学元九別後忽夢見之及寤而書遠垂蒙青桐花詩帳然歎懷因以此寄）

三月三十日　春盡日復暮（送春）
六月初七日　江頭蟬始鳴（早蟬）
元和九年秋　八月月上弦（題慈恩寺）

枚挙にいとまがない。傾況には次のような句がある。

一星亦官　百星亦官（上古）
十月之郊　霹水羣生（十月之郊）
曷日予雨　乃曰庚午　……　鼎迺征之　彝倫攸斁　……　三五不備　回克攸遂（燕子樓）
遐想三五　黄帝登雲　堯年百余　二儀分位　六気不渝　二景如璧　五星如珠（陵霜之華）
老夫哭爲子　日暮千行血　……　老夫已七十　不作多時別（鴛子）
道路五千里　門閭三十年（寄上兵部盧侍郎・戶部盧侍郎・戶部杜三侍郎）
五日一朝天　南山對明鏡（長安寄明府）
一別二十年　依依過故墟　……　二子伴我行　我行感節　……　一別二十年　人歴幾回別
（上湖至敬山贈文風書元植）
曹溪第六祖　踏碓逾三年　……　一国一家迹　一灯分百千　……　左右二菩薩　文殊并普賢
身披六銖衣　德劫為大德　……　一十一家中　身意皆快然　八河注大海　中有摩伽船　……
……　苦哉千万人　流血成丹川　……　市廛盲老人　長者乞一錢（鉢陽藩寺有丁行者能修無生忍担水施僧況故命接首作詩）
四月八日明星出　摩耶夫人降前伴　八月五日佳氣新　昭成大后生聖人　開元九年燕公說　奉
詔聽置千秋節（八月五日歌）

且看八月十五夜　月出看山盡如画（諸山遠芳上人山水歌）

これまた、ほとんど挙げるにいとまがない。両詩人の相似は、顔況の白居易に対する影響と、考えてよいであろうか。

もっとも、顔況の作品中、特に「八月十五日」をはっきりと記すものは「八月五日歌」のみである。けれども、この歌は、玄宗皇帝の誕生日をうたったもので、当時人口に膾炙したものであろうから、ただ一首のみという理由で、その影響力を小さく評価することはできないであろう。

現存する顔況の作品は、詩文をあわせて三巻にすぎないが、もとは、三十巻あったと伝える。十分の九がすでに亡失したことになる。佚した作品のうちにも「八月十五日」をよみこんだ詩が、相当あったのではないかと、想像される。

潯陽江頭夜送客　枫葉荻花秋索索　主人下馬客在船　挙酒欲飲無管弦　醉不成歓慘将別　別時茫茫江浸月　忽聞水上琵琶声　主人忘帰客不発　尋声暗問弾者誰　琵琶聴停欲語遅　移船相近邀相見　添酒回燈重開宴　千呼万喚始出来　猶抱琵琶半遮面　転軸拨弦三両声　未成曲調先有情　弦弦掩抑声声愁　似訴平生不得意　低眉信手続続弾　説尽心中无限事　軽攏慢撚抹復挑　初為霓裳後六么　大弦嘈嘈如急雨　小弦切切如私語　嘈嘈切切錯雑弾　大珠小珠落玉盤　間関鶯語花底滑　幽咽泉流氷下灘　氷泉冷澁弦凝絶　凝絶不通声暫歇　別有幽愁暗恨生　此時無声勝有声　銀瓶乍破水漿迸　鉄騎突出刀槍鳴　曲終収撥当心画　四弦一声如裂帛

東船西舫悄無言　唯見江心秋月白　……

これは、いうまでもなく、白居易の「琵琶行」の前半である。

清の批評家の趙翼は、その詩論集『甌北詩話』巻四に「長恨歌自是千古絶作」といい、「琵琶行亦是絶作」とたたえた。やや大袈裟な感じもしないではない。宋の張戒は『歳寒堂詩話』上に「長恨歌元和元年翰林院時作　是時年三十五　謫江州　十一年作琵琶行　二詩工拙遠不侔矣　如琵琶行　雖未免於煩悉」という。けれども、その張戒が、ことばをつづけて「然其語意甚当　後来作者　未易超越也」というのである。琵琶行の作られた年から千百四十一年を経過した今日、なお紅涙をしぼるに堪える以上「千古の絶作」なる評語も文字通りに受けとらざるを得ない。

さて、宋の洪邁は『容斎五筆』巻、「琵琶行海棠詩」の條に「白樂天琵琶行一篇　読者但談其風致　撥其詞華　至形於樂府　詠歌之不足　遂以謂眞謂長安故倡所作　予嘗疑之　唐世法網雖於比当寛　然樂天嘗居禁密　且諫官未久　必不肯夜入浔陽婦人船中　相從飲酒　至於極絲竹之樂中夕方去　豈不虞商人者　它日識其後乎　樂天之意　直欲摭寄天涯淪落之恨尔」という。吉川幸次郎博士は『新唐詩選』にこの説を紹介して「ある批評家の説によれば、この詩は、作者が天涯淪落の恨いをのべようとした小説であって、実際にこうした女にめぐりあったわけではないと。もししからば、もとの詩が、すでにフィクションであったわけである。」といわれる。「琵琶行」フィクション説は、すこぶる興味がふかい。

もっとも、近人陳寅恪氏は『元白詩箋證稿』第二章に、洪邁の琵琶行の読み方には誤解があるとして、その個所を指摘し、「夫此詩所敘情事，既不如洪氏之誤解，則洪氏抵触法禁之疑問可以消釈，即亦無其事之假説，亦為實賜矣。」とする。フィクション説は誤解の上に立った推論だ、と

いうのである。ところで、吉川博士は、前引のことばにつづけて、こう説かれる。「フィクションであるにせよ、ないにせよ、詩の主題となっているものは、詩人の他の多くの詩とおなじく、弱者に對する同情である。いますこしくわしくいえば、純粋な心をもちながらこの世では弱者とならなければならないものへの同情である。」

この主題は、いま引いたことばに明らかなように、白居易の多くの詩に共通した、いわば「大きな主題」である。「大きな主題」が具体的に一つの作品として結晶するためには、さらに何らかの要素が加わらねばならない。では、白居易の「大きな主題」を「琵琶行」に具体化させた要素は、何だったのであろうか。

一体、文学作品が生れるための原因や動機などというものは、作者みずからにも、明らかには意識されない場合が多い。まして、千年以前の作品から、それをさぐろうとすることは、砂漠に寶石を求めるに似たわざとも、いえなくはない。けれども「琵琶行」の場合には、かなりのたしかさをもって、それと推測しうるものが、ないわけではない。

一つは、白居易が「琵琶行」を作った前の年の元和十年、江州に流される途次、鄂州に宿った夜、隣の船で歌う女を見たことである。「夜聞歌者」という詩がある。

夜泊鸚鵡洲　江月秋澄徹　鄰船有歌者　発詞堪愁絶　歌罷継以泣　泣聲通復咽　尋聲見其人
有婦顔如雪　独倚帆檣立　娉婷十七八　夜淚如　真珠　雙雙墜明月　借向誰家婦　歌泣何
淒切　一向一霑襟　低眉終不説

この詩を少し改めれば、ただちに「琵琶行」のはじめの段となることは、おそらく、多くの人

が否もうとはしないであろう。両詩のむすびつきについては、前記の淡遠が『容齋三筆』に、趙翼が『甌北詩話』に、すでに触れている。

いま一つは、顧況の「李供奉琴聲箜篌歌」と題する次の詩である。

國府梁手彈箜篌　赤黄條索金鎖頭　早晨有勅賜寄殿　夜靜遂歌明月樓　起坐可憐能抱撥　大指讀絃中指撥　脫頭花落舞裙裂　手下鳥驚飛撥刺　珊瑚柱一聲　一聲鳴錫錫　蹙結屏一絃　一絃如擲鈴　急彈好　遲亦好　宜遠聽　宜近聽　左手低　右手擧　易調移音天賜與　大絃似秋雁聯聯度隴頭　小絃似春燕喃喃向人語　手頭疾　脫頭軟　來來去去如風卷　聲聲冷冷鳴索索　垂珠碎玉　空中落　美女爭藏玳瑁簪　聖人送上眞珠船　大絃長　小絃短　小絃緊快大絃緩　初調粥粥似鶯雛水上弄　新聲入深似太清仙鶴遊祕館　李供奉　儀容質　身才稍稍六尺一　在外不曾識教人　內裏聲聲不遣出　指削葱　脫削玉　謠諷號令五味足　弄調人間不識名　彈盡天下崢嶸曲　胡曲漢曲聲皆好　彈箜篌曲體曲肝腦　往往似空入戶來　憶曾隨風落春草　草頭只覺風吹入　風來草即隨風立　草亦不知風到來　風亦不知聲急急　燕玉蜀　點銀燈　光照手　實可憎　只照箜篌絃上手　不照箜篌聲裏能　驚風閑　拜駕殿　天子一日一迴見　王侯將相立馬迎　巧聲一日一迴變　實可重　不惜千金買一弄　銀器胡瓶馬上馱　瑞金蛙蹄滿車送　北州好手非一國　一國來西盡南北　除却天上化下來　若向人間實難得

「琵琶行」は甘美だが、その甘さを嫌味だとする人もあるであろう。だが、そういう気むずかしい読者も「轉軸撥弦三兩聲」から「四弦一聲如裂帛」にいたる二十二句百五十四字の、彈奏を描く巧みには、感歎しないわけにはゆくまい。白居易は、よほど楽音描写が得意だったとみえて、

「琴中吟」の「五弦」には

……　趙叟抱五弦　宛轉当胸撫　大声猶若厳　飒飒風和雨　小声細欲絶　切切鬼人語　又如
鶯語喜　転作猿啼苦　十指無定音　顧側宮徵羽　坐客聞此声　形神若無主　行者聞此声　駐
足不能挙　……

とうたい、「新楽府」の「五弦弾」に

五弦弾　五弦弾　聴者傾耳心寥寥　趙璧知君入骨愛　五弦一一為君調　第一第二弦索索　秋
風拂松疎韻落　第三第四弦泠泠　夜鶴惜子能中鳴　第五弦声最掩抑　酬水凍咽流不得　五弦
並奏君試聴　凄凄切切復錚錚　鉄声殺　氷声寒　殺声入耳寒血懐　寒氣中人肌骨酸　曲終声
盡欲半日　四座相對悉無言　……

とうたう。だが、これらの楽音描写に感歎した人が、顧況の「李供奉弾箜篌歌」を読むとき、暗合というにはあまりにも相似た作品の既に存することに、驚きを覚えないであろうか。

同じ楽器の音をうつしても、李賀の「李憑箜篌引」は顧況とはその発想が異るのに、白居易の場合は楽器が異り、奏者が異っても、その音をうつす発想は顧況のそれを引きうすしたように相似ている。

顧況と白居易との出会いについては、五代の王定保の『唐摭言』や、『旧唐書』に、次のような記事をのせる。

白楽天初挙　名不振　以歌詩謁顧況　況謔之曰　長安百物貴　居大不易　及読至賦得原上草送

友人詩曰　野火燒不盡　春風吹又生　況敬之曰　有句如此　居天下有甚難　老夫前言戲之耳
（唐摭言　巻七）

年十五六時　袖文一篇　投著作郎吳人顧況　況能文而性滑稽　後進文章　無可意者　覽居易文　不覺迎門礼遇曰　吾謂斯文遂絶　復得吾子矣　（旧唐書　巻一百六十六）

この出会いの、時と処とについては、疑いもないではない。万葉日白居易伝」（武漢湖北人民出版社）頁七注二にいう。

白居易以所業謁見顧況事，見「唐摭言」等書，都說当時白居易年十五六，可是在七八八年（貞元四年）以前白居易到長安是不可能的。貞元五年以后，顧況就因納朝諸貶官饒州，隨即到蘇州和蘇州刺史韋應物，信州刺史劉太真等往還。如果說白居易有謁見顧況的事，在長安不如說是在饒州或蘇州更合事実。「摭言」記事多誤，并不可靠。

たしかに「唐摭言」の記事を、そのままにうけとることは危険である、ただ、前引の二つの記事から、少くとも、次のことは考えられるであろう。すなわち、いつ、どこでかは、確かでないが、顧況と白居易とは、出会ったことがある。その出会いは、白居易の方から積極的になされた。顧況は、白居易の才能を認めて、大いに激励した。

甲の詩人が、おのれの作品集をたずさえて、乙の詩人を訪ねる、ということは、甲の乙に対する傾倒を前程としなければ、考え難いことである。白居易は、顧況に深い尊敬を懐いていたに違いない。尊敬する詩人から「吾謂斯文遂絶、復得吾子矣」というような賞讃を賜られたとする「旧唐書」の記事がまことならば、白居易は、いよいよ顧況に傾倒したであろう。それが常情であ

ろうと思われる。同じく『旧唐書』によれば、白居易は、幼いころから「聰慧絶人」であった。たぶん、見るほどの　聞くほどの作品は、ことごとく貪り読んだことであろう。白居易の作品と顧況のそれとの親近性は、たしかに、両詩人のこうした関係を思わせるものがある。

ところが、白居易自身は、例えば、「自吟拙什因有所懐」なる詩に、こう歌う。

……　時時自吟詠　吟罷有所思　蘇州及彭澤　与我不同時　此外復誰愛　唯有元微之　……

古今の詩人では、韋應物と陶淵明とを除いては、ただ元稹を愛するのみだ、というのである。もっとも、他の詩中では、あるときは謝靈運を、あるときは孟浩然を、たたえている。だが、顧況については、その人に触れたことばを残していないように、わたくしには見うけられる。

三

顧況に「聽角思歸」角笛を聴いてふるさとに飯らまほしくなりて、と題する七言絶句がある。

故園黄葉満青苔　夢後城頭曉角哀　此夜斷腸人不見　起行殘月影徘徊

ふるさとの黄ばめる木の葉　青苔おおい散ろうを　見しか
夢さめぬ　城のほとりに暁つぐる　かなし　角笛
この夜　ほとほと　胸くだけ　あくがれしひと　見えざりき
たちていずれば　朝月夜　あわあわとして　影ぞ　さまよう

この詩は『唐詩選』にえらんで載せるため、多くの注家によって、解釈せられた、管見に入った限りでは、いずれの解釈も、安らかならぬ部分をふくみ、微妙なところでこの詩の真意を失っているように考えられる。ここではまず、私解をのべ、その後、他解について批判したい。

故園香繁滿青苔　gu yuan huang yep man ching tai

この詩は、故園　の二字で、始められる。

故gu は、のどの奥の方で、静かに、短かく、尻下りに発音され、すぐに消えてしまう、去声、である。つづく園yuan は、まるくつぼめた唇から洩れるyu の音が、口のひろがるにつれて、ためらいながら　微かに上昇しつつ平明なaとなりかけ、しかし、開ききることなく、やがて上の歯ぐきにあてた舌の先で押えつつ　さと閉じられる、陽平声、である。

ふるさと、にしろ、home にしろ、Heimat にしろ、gu yuan に似て、おくふかく、やわらかで　静かに　平明ながら、かすかに悲いをおびた、音調を、もっている。洋の東西を問わず、そうした音調をもってしなければ、人間の、そこに対する感情を、現わし得ないもの、これこそ、ふるさと、なのであろう。

そのような故園に　いつの間にか飯っていた詩人の、目に入るもの。それは、黄香huang yep の音調がふくむ感情をそのままに、秋深い林に、穏かな陽ざしをうけて、絶え間なくはらはらと散りおちる、木の葉であった。

木の葉は、ひとところにのみ散りおちるのではない。詩人がまなこを向けるここよりかしこへ、さらにそのあなたに　すべて満ちている。満man は、つぼめた唇からおし出された m 音が a とび

ろがりつつ、ひとときの間、押さえられ、うねりを描きながら、やがてゆとはね上ってゆく、上声の文字だが、このときの、詩人のしずかな驚きをあらわすには、これ以上にふさわしい文字は、なかったであろう。

上昇しつつ、なおふくむように押さえられていた ziun の音は、次に来る、冴えざえと弾んだ、ding の音で、はげしく破られる。同時に、穏かに輝ばんだ光の中に、黄ばんでおちる木の葉のかもし出していた、ものうい色調が、不意に、鮮かな青によって、切り裂かれる。

青いもの、それは苔 tai- である。苔はほとんど黄葉におおわれていて、ところどころ、わずかにその色を見せるにすぎないが、それだけにかえって、目の醒めるような鮮烈さであった。

「ああ、どうしてこんなに思いがけなく、美しい故園の風景の中に、立つことができるようになったのだろう。」非現実的なまでに鮮かな青に、ふとゆらぐ反省。脚韻をふむ場所に据えられた陰平のこの文字のもつ tai- という音調は、その反省をつつんでいるように、感ぜられる。

夢後城頭曉角哀　　méng hòu chéng tóu shǎo jué ài

故園も、黄葉も、青苔も、すべては夢 méng であった。さだかならぬもの、おぼろげなるもの。そこには、うつくしいものも、あやしいものも、溶けこむことができ、たゆたい流れ、そうして、それらのすべてが下降の感じで破れるもの。méng には、そのような感情が、含まれている。

ゆめがさめて、という意味の、夢後 méng hòu には、さめたものがはたして夢か、さめたとおもう今が夢か、と迷いつつ、間の中で独りぼっちと溜息をつく人の、ためらう思いが推察する。

だが、夢後につづく、鋭い、城頭 chéng tóu の音は、さめやらぬ人のおもいを、現実にひき

もどす・城頭・そこには、夜もすがら寝ずの番をしている兵士がいて、「今のお前こそ、怪しいなく、現実のお前だ」と、よびかけるように、暁をつげる角笛を吹く。夢をふきはらう朝風の颯颯たるに似たsiao 暁、それでもなお問いかけようとするのを、向うでガチャッと切ってしまった電話のようなjuek 角、その音に息をのむようなpi の音のかなしさ。

此夜斷腸人不見　tzu ye duan chang rén but jien

はっきりと断ち切られたものが夢と知っても、思いは、夢とともに消えはしない。夢を見た、此夜tzu ye のことが、このことばのもつ音調さながらに　執ねく、なごる。なごる思いの上に、断duan と、にぶく、ぶきみな音をたてて、落ちかかり、腸chang と、鋭く、はらわたをひきちぎっていった　悲しみ。

人不見rén but jien　あの黄葉の散りおちる青苔のほとりで、相会うのがつねであったその人が、この夜は、そこに、見えなかった。いましばらく、夢が続いてくれさえすれば、現れたにちがいない。あの人。tzu ye duan chang rén but jien　とめどないおもいにとりみだし　満りただようかなしみに茫然として自失するひとのすがたが、この重くよどんだ音のつらなりから、浮び上らないであろうか。

起行殘月影徘徊　chi shing tsan yuet ying pai huai

闇の中で独りいるに堪えなくなった詩人は、起行chi shing　ついと立って外に出る。東方の地平線のほとりは、ぼっと明るくなりかけているが、まだ、あたりは暗い。ふり仰ぐ空には、殘月tsan yuet　夢よりもなおおぼろと、消えのこった月。そして、地上には影ying のよう

にとりとめのない詩人のすがたが　漠かなにかのように、徐徐に　さまようばかり：。

以上が私解である。次に、諸注家の解釈の問題とすべきところをのべる。

服部元高『唐詩選』（一八一三刊。ここでは『漢籍国訳解説』所収の本によった）は、起句を「故園ノ黄葉青苔ニ満ツラン」と訓じて「ころしも秋かぜ、木の葉も黄ばみ落て、庭の青苔にみちくたであらう、たれ掃除するものもなければ、さだめて荒はてたであらうと想ふ」と解し、千葉芸閣口述『唐詩選師傳講義』（一八二三刊）戸崎允明注『唐詩選』（一七八四刊。ここでは『漢文大系』所収の本によった）久保天随『唐詩選新釈』（『漢文大成』所収）秋清潭『国譯唐詩選』（『漢文大成』所収）尚野道明『唐詩選詳説』（一九三九年明治書院刊）は、いずれも服部訓を襲い、戸崎氏が「夢後想像語」とするのは、服部解に従ったものと見てよいであろう。森槐南『唐詩選評釈』（『漢文大系』所収）釈氏　尚野氏・高木正一『唐詩選』（『新釈漢文大系』所収）は、いずれも、故園の黄葉が青苔上に落ちている夢を見たのだ、とする。黄葉青苔が夢中のものなればこそ、夢後の暁角が哀しいのである。服部・戸崎解はあやまりで、森氏などのが正しい。けれども、秋氏・尚野氏は、それならばなぜ、「満つらん」と、想像の語のごとく訓ずるのであろうか。

第三句について、千葉氏は「他国ニ居ルユヘ、此夜カ、イヤニ成リ、腸ガ断チ切レルホド、悲シケレド我心ヲ知ル人モナケレバ、誰ニ語ルコトモナラヌデヤ」といい、戸崎氏は「夢後悽然、無可共語者」といい、森氏は「木末頭哀角のために寥醒せらるるはち寇夕悲思客腸を断尽して、人の之を見るなし」といい、久保氏は「郷思悽然として堪へられず、終夜客腸を断ち尽して、人の共に語るべきものなく」といい、秋氏は「他人は勿論、故園の人も見えず、独断腸するなり」といい、尚野

氏は「そこで今夜は非常に悲しくなって腸も千切れるやうだが、此の切なる情を話さうとする人も見えないので」といい、高木氏は「夢さめたばかりのおのれは、それをきくほどに、いよいよ思郷の情がつのって、腸もちぎれそう。人の姿もみえなければ、須臾のさびしさたへがたく：」という。

それぞれの解に、いくらかの相違はあるが「人不見」の「人」を、夢さめた後に、傍にいて話を聞いてくれるべき人　と解して、「夢中の人」としない點では、同じである。それでは、顧況がこの詩にこめた痛切な思いが、わからないことになるではないか。

まず「此夜」という語を凝視してみよう。この詩では、作者は、夢みるときと、夢さめての後とを、はっきり、わけている。夢を見たのは「夜」と意識され、夢がさめたときは「曉」と意識されているのである。もしも「人不見」の「人」が、夢さめたのちのわが傍の人をさすならば、前の句ですでに曉角どうち出した後の「夜」は、蛇足ではないか。作者が「此夜」といって、他のいかなる夜でもなく「この夜」と限定しているのは、その夜を満した「夢」をさすものでなくて、何であろう。

つぎに、「人不見」の「人」の字が据えられた位置に、注意しなければならぬ。七言の句では、腳韻をふむ第七字をのぞけば、第五字目は、最も強く響く文字、いいかえれば、作者が最も心をこめた文字を、彫りこむべき位置である。この句は五句で、第七字は韻をふまない。さすれば、第五字目こそ、この句の眼睛でなければならない。「他人は勿論、故園の人も」というような、たれであってもかまわぬ程度の人を指す文字を、この位置に下えたとすれば、それこそ、作者は、

凡庸詩人の名を避け得ず、作品は、よほどおろそかに作られたものだとのそしりをまぬかれまい。顧況は李供奉の登仙洋姿を、あれほど執拗に追求した　音調に鋭感な詩人ではなかったか。

この「人」は、地上にただ一人、故郷とその人とが切りはなせないものとなってつねに作者の胸中にある人でなければならぬ。それが　女性か男性かは、問うところではない。中国の詩人は、同性の友人を思う詩に、他の国の詩人ならば、恋人を思うときにしか用いないような、濃厚な素情を示すことばを、はばからぬ習慣があるからである。

ただ、この詩は、顧況が、直接おのれの心情を表現するためにうたった、というよりも、辺境の兵士が故園を思うこころを、代って詠じたものであったかもしれない。顧況と同時の詩人李益に、やはり『唐詩選』にえらばれた『聽曉角』と題する詩「辺霜昨夜塞南楡　吹角当城片月孤　無限塞鴻飛不度　秋風吹入小平于」があって、暁角・片月が、ただちに、思郷の情とむすばれるところからも、右のような想像にいざなわれる。もしこの想像があやまっていないならば、この「人」は、兵士の妻か、恋人か、であろう。

いずれにせよ、その「人」が、特定の一人をさす、という点では、動かない。こうした人なればこそ、夢に、その人とは切りはなせぬ故園の風景が現われながら、その人は見えなかったことが、断腸の思いをひきおこすのである。

杜甫の「夢李白」という詩に「故人の我が夢に入るは、我が長しなえに相憶うを明らかにするなり」の句があり、白居易の「初與元九別後忽夢之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然感懐因以此寄」と題する詩に「曉来の夢に君を見き。應にこれ君の相憶えるなるべし」といい、同じ詩人の「長恨

歌」には「悠悠たる生死、別れて年を経　魂魄帰って来って夢に入らず」とうたう。相思の人は必ず夢に入る、というのが、古人に一般の観念だったのである。

さすれば、夢にその人の見えないのは、わたしのその人を思う情が足りないためか。これほどに苦しく思うわたしだのに。あるいはその人が、もはやわたしを思わないのであろうか。いいや、あの人にかざって、そんなことのあろうはずがない。しかも、あの人に変事があって、夢にさえ通わぬあたりに、去ってしまったのではないか。

さまざまの思いが、その人にまつわって湧き上る。さればこそ、第四句の、逝って外に出ざるをえない「遠行」の文字が、生き生きと働いてくるのであろう。

さて、第四句について、第五字目の「影」に目を注ごう。戸崎氏は「吾影」とし、他の注家もおおむねこれに従う。高木氏は「暁の空にかかる寒んの月影、つめたくわが身を照らして徘徊する。徘徊とは月の光がちらつくことを言う」とする。戸崎氏の解がいい。この影が、おのれの影であるからこそ、第三句の「人」と、相対する位置に据えられたのであろう。

わたしの魂は、すでに故園に向って飛んでいる、だが、わたしの体は目に見えない鎖にしばられて　この城辺を離れることができない。すでに魂の去った体は、影にひとしい。その、ぬけがらに似た影さえが、なお「人」を慕って徘徊する。

この詩は、第一句　第三句が夢中を、第二句・第四句が夢後を、描く。夢は現実によって破られ　現実は夢によって飛かれ、その夢は、さらに現実によって破られ、夢と現実とがきれぎれになって、腸をひきさくさまを、そのままに四つの句に構成したもので、詩む場合にも、各行は、

その、七字四の文字でぷつつり切って、次の行にうつるまでに、かなり長い休止をおかねばならぬであろう。

字面にも、音調にも、各句の排列にも、こまやかに心をくばられたこの詩が、単なる懐郷の情をのべたにすぎぬ作と見すぐしてよいであろうか。殊にわざわざ「思慕」なる文字が えらばれたのは「人」をおもう切なさと、思いがつわに、かなえられないかたちで、おのれにかえってくる、現実の世界に対するかなしみを、うたおうとしたからでは、なかったか。

そもそも、ふるさと、なるものが、単なる地理上のある一点をさすのではなく、おのれを生み、おのれを育て、おのれを愛憎した、人々との、関係においてあるところの土地、を指すのであろう。「但だ主人をして能く客を醉わしめば、知らず何れの処か是れ他郷」は、酔客李白の詩語ではあるが、一見むちゃくちゃな論理を弄するに似たこの両句が、故郷のもつ本質的意義を、実に深く 的確に、いいあてていることに驚く。最も愛する人の存在するところ、それが「故園」なのである。

四

頼況の生涯については、よくはわからない。けれども、唐では李肇の『唐国史補』、孫光憲の『

歴代名畫記』、五代では『舊唐書』、元では辛文房の『唐才子伝』、明では姚士麟の「顧著作伝」、清では『四庫全書総目提要』、帝哲嘲の輯めた『唐詩百名家全集』などに、それぞれ、簡単ながら伝があり、その他、歴代の詩話類に軼事が散見する。いま、伝記のうちで比較的くわしい『唐才子伝』巻三に見える記事を、幾段かに区切って掲げ、他の記事によって補いながら、説明してみよう。

顧況　況字遺翁　蘇州人

顧況の、顧は姓、況は名、遺翁はよび名である。

蘇州の人、というのは、その人の自称する本籍が蘇州だということである。顧況の本籍に関して、上記諸伝の書き方が一様ではない。『国史補』が「呉」とし、『名画記』が「呉興」とし、『旧唐書』『才子伝』が「蘇州」とし、宋の尤袤の『全唐詩話』が「姑蘇」とし、「顧著作伝」『百名家全集』が「蘇州海鹽」とし、『全唐詩』『四庫提要』が「海鹽」とするのが、それである。

呉と、蘇州と、姑蘇とは、よび方は異っても、同じく、今の江蘇省に属して太湖東岸にあるまち蘇州（呉縣）を指す。もっとも、『新唐書』巻四十一、地理志に

蘇州呉郡雄上　……縣七　呉　長洲　嘉興　崑山　常熟　海鹽　華亭

と記すように、唐の代には、呉縣等の七縣をふくむ地域を、蘇州といい、その蘇州をふくむ揚子江下流沿岸の地域を呉郡といい、呉郡を単に呉とよぶことも普通であったから、諸伝のいう「蘇

州」あるいは「呉」が、広狭いずれの義をとるかを検討してみる必要がある。

呉興は「湖州」ともよばれる。やはり太湖には沿いながら、呉県には西南にあたる対岸に近いまちで、今の浙江省に属する。

海塩は、呉興と同じ浙江省に属するが、上海の西南約百五十キロメートル、銭塘江が杭州湾に注ぐ河口の北岸のまちである。

呉県・呉興・海塩の三つのまちは、互いに八十ないし百キロメートル離れている。

『全唐詩』や『四庫提要』が、顧況の生存した時代に近い多くの文献に記す「蘇州」をとらずに「海塩」をとったのは、「顧著作伝」によったためであろう。

「顧著作伝」は、明の嘉靖（一五二二～一五六六）中に上梓せられた『顧華陽集』の首めに掲げられる。集の編者は、顧況の二十五世の孫と称する顧名端である。この集は、清の咸豊五年（一八五五）に重刻された。刊行者は、三十三世の孫と称する顧炳章である。重刻本は、明刊本に漏れて『四庫提要』に指摘せられた若干の作品をも補って、顧況の全集として今日われわれが見うるものとしては、最も備わっているように思われる。

さて、「顧著作伝」の撰者姚士磷が、顧況を「蘇州海塩人」としたのは、顧名端の説くところに従ったのであろう。姚氏の「伝」にはいう。

況家景南五十里之横山　宅辺有禅寂寺　故有家在双峯蘭若辺之句

文中の「横山」について、孫鉞なる人の撰した「重刻唐著作郎顧華陽先生集序」にいう。

海塩顧賓角顧家西君者民弟也　与余同学於郷　為余言　海塩故多陰君子也　南境多山　有山

山子然絶山　逆流溪而上者　角里山也　秦角里先生故居也　北境多水　又山子然絶溪流　而
字角里相望者　横山也　唐著作華陽先生故居也　今丙君者居　則角里之秦溪也　而則華陽之
一脈也

多分、これらの記事によってであろう。近人潘景鄭『著硯樓書跋』（一九五七年、上海古典文学出版社）には

按通鑑安海塩人。而傳称蘇州海塩者。蓋唐時海塩猶屬吳郡故也。

と解釈しているのである。

『海塩県志』巻十五には顧況の伝を立て、その注に「況憶横山故居詩家在夢峰蘭辺……」という。この筆つきが、姚氏の『伝』に似ているところからみると、『海塩県志』は姚氏の『伝』によって顧況を県人と見たもののように察せられる。同県志の顧況伝にはまた

況家横山劉長卿攝県有過横山顧山人詩

という。劉長卿が海塩の県令となったのは、同県志巻二「職官表」に「至德中」のことだとし、顧況を訪ねた詩は『全唐詩』によれば、「過横山顧山人草堂」と題する次の詩である。

極見山相桃　誰言路尚通　人来千嶂外　犬吠百花中　細草香雞雨　垂楊閑鴈風　却尋桃徑去
惆悵緑溪東

この詩が劉長卿の海塩在任中の作に違いなければ、顧況の家が海塩横山にあったことは確定するであろうが、この詩の作時はわからない。そうして「横山」という山名が、普通名詞から固有名詞に変じたような名で、従って各地に同名の山がすくない。たとえば諸橋轟次『漢和大辞典』には、

中国で「横山」とよばれる山を十二あげ、そのうち四は江蘇省に属する。この四つの中に海塩の横山は含まれない。考察すると ①徽州府の西 ②兵県の西南 ③江寧府の東南 ④松江府の西北。このように横山がいずれにもこちらにもある山ならば、別長卿詩の横山も、海塩のものと断定することは なおためらわれる。「海塩県志」に「憶横山故居詩」とする顧況の詩も、「全唐詩」では「酔後所居三首」の一つとする。酔後は、海塩よりはるかに南 天台山を北に望む、霊江入河口のまちである。

いま、かりに顧況の住んだ横山が海塩の横山だったとしても、それで姚氏の「傳」や、「渓月樓記」のいうように、そこを彼の本籍とすることには、なお検討の余地はないであろうか。家居の地ならば、横山も、酔後も、のちにふれる茅山も、そうである。ことさらに横山のみをとることもあるまい。

さて、顧況や、その友人たちは、顧況の「ふるさと」を、どの地としているのであろうか。顧況の作品では

a 野人夜望江南山　江南山深松桂間　野人覚後長歎息　帖麻船吉作山色 ……（「苦蕨山歌」）

b 江城吹晩角　愁殺遠行人　淫祠猫防虎　吳宮欲入春 ……（「別江南」）

c 老病力難任　猶多饒雪侵　鹽魚消宦況　鴉鳥識歸心　急雨江帆重　殊更歌相深　鄉園殊可望　漸漸入吳音

d 鳴雁嗷嗷北向頻　浪波何処是通津　風塵海内惜愛髮　涕淚天涯怜一身　故里青書應絶筆　異鄉景物又更新　復拙卯後依歸隱　吳淞香蓴浩吐春

知人の作品では、顔況より一年前に道士に登第し　例の「姑蘇城外寒山寺で有名な張継に
e 吳郡歲貢尺嘉賓　後進之中見此人　別業臨流四上　換得書屋對碧春（送劉道士加上親也父）
があり、また、詩僧釋皎然に「送顔處士歸吳郡省親」と題する詩に
f 吳門顔子子平尚　風流真古誰似君　……
の句が見える。

aで、顔況が江北の人でないことは明かだが、bの「吳官」cの「吳音」dの「吳治」の「吳」は吳県をさす狭義の「吳」とも、揚子江下流一帯をさす広義の「吳」とも、とれる。けれども、fの「吳門」は、これは、吳県をさすものであろう。題下の注は『四部叢刊』所收の景宋精鈔本にも見えて、既然自注と考えられるが、もしそう考えておやまちでないなら、「吳門」と書きわけている点からも、彼の本籍は吳県だったということができるのではないか。

姚氏の説以前の文献は『名画記』が「吳興の人」とする外は、みな「吳の人」もしくは「蘇州の人」とする。「吳興」かもやはりであろうことは釋皎然の詩題注からいえる。「海塩の人」とするものは見えないのである。こうしたことから考えて、顔況を「海塩の人」もしくは「蘇州海塩の人」とするよりは、「吳の人」「蘇州の人」とよぶ方が穏かであると、わたしは考える。かりに、顔況が、海塩で生れ、育った、としても、彼は「海塩の人」とよばれるよりは「吳の人」もしくは「蘇州の人」とよばれることを欲したであろう。

至德二年　天子幸蜀　江東侍郎李希言下道士

至德二年は西歴七五七年である。その前の年、安祿山の叛乱軍が長安の都に侵入し、玄宗皇帝李隆基は蒙塵し、馬嵬駅で楊貴妃が死に、玄宗は退位し、その子の李亨が即位した。肅宗である。

顧況の進士登第の年を「至德二年」と明記するのは『才子傳』の外には、姚氏の『伝』と『四庫提要』と『海塩県志』等である。その他は「至德中」「至德初」等と記し、あるいは全くこれにふれない。顧況自身は「戴氏廣異記序」に「至德初天下離乱、況始与同登一科」といっているから、『才子伝』の記述は、まず妥当なところであろう。

江東採訪使李希言とは、至德元年十二月永王李璘が李白などをブレンとして兵をひきいて東巡したとき、これを詰問した、吳郡太守兼江南東路採訪使の李希言のことである。

顧況の生卒年は、わからない。豊田穣氏は森槐南『唐詩選評釈』（博文館発行文庫本）附載の作者略傳中に（七二五？―八一五）とし、陸・馮『中國詩史』は（公元七二七―八一五？）とし、いずれも根拠は示さない。登第の年は、豊田説ならば三十三歳、陸・馮説ならば三十一歳である。唐代の俗諺に「三十老明經、五十少進士」といい　二十九歳で進士に登第した白居易が「慈恩塔下題名処、十七人中最年少」とうたうところからして、顧況の進士登第を三十三前後にみることは、あまり遠くない推定といえよう。

いましばらく豊田説に従えば、顧況の生れた年は、玄宗の開元十三年乙丑七二五、唐の国勢が最も伸長した時期である。この年、李白、王維は二十五歳、杜甫十四歳、元結七歳であった。わが國では、聖武天皇即位の次の年、すなわち神亀二年で、萬葉歌人大伴旅人の死ぬ六年前である。

皇甫湜の書いた顧況の家集の序に「九十歳之日」とみえるから、その卒年は、元和十年か十一

年ごろ、すなわち、白居易が「琵琶行」を作った前後のことであったろう。

顧況の家系、父母、兄弟等についても不明である。ただ、呉地においては顧氏は名族であって唐代に採ばれた『呉地記』宋代に著された『呉郡志』にも、顧の姓をなのる人々の名士を数えている。顧況もまた、そうした名族につらなる家に生れたのであろうか。ただ、前記二書には、顧況その人の名を記さない。

彼が「同時代の詩人劉太真と親族関係にあったことは、彼の「信州刺史府君集序」に「以況從表兄弟平生相愛」の句の見えるので知られ、大歴初年新羅王憲英がなくなったとき、唐よりの弔問副使としてその地におもむき、その旅行での見聞をしるした「新羅國記」一巻の撰者である韓皓が從兄だ、ということは、顧況にその送詩があるので知られる。同族中の同じ世代の間で十二番目にあたる「ということは、劉太真の「顧十二況左遷云云」の詩題で明らかである。

叔父のひとりに、洙　泗両水のほとりに邸宅を構える人のあったことは　張継の「送顧況泗上覲叔父」の詩で、蘇州の虎邱西寺に住職する叔父のあったことは顧況の「虎邱西寺経藏碑」の文で知られる。

後の方の叔父は、詩を七覚、字を惟簡といい、同寺の塔廟を造建するのに功績のあった人である。文中、七覚が八歳で得度したこと、内外典に通じた俊敏な僧であったことをのべ、更に、「況受經於叔父。根鈍智短。曾不得乎少分」といっている。この「受經」は儒教の経典の素読をうけたということではなく、また、単に仏経を読み習ったというだけでもなく、小僧として叔父のもとにやられ　ある期間、僧たるべき教養をうけたのではないか、と想像させる書きぶりである。「獨

題青龍寺」「帰陽簡寺有丁行者能修無生忍捧水於僧況師命語首作詩」などの詩「虎邱西寺經藏碑」などの文章から察せられる。顧況の佛教についての知識は、樂天居士白居易とは、格段の差があるように思われる。

善為歌詩　性怯諧　不修檢操　工畫山水

こういうBohemianでは、とうてい寺院生活には堪えなかったであろう。「根鈍智短。曾不得乎少分」は、その告白であるようにも読める。

顧況の性格については『旧唐書』にも「貶王公之貴。与之交者。必戮侮之。」どころす。だとすれば、白居易とのエピソードなども当然で、奇とするにはあたらぬことであったろう。

唐の孟棨の『本事詩』情感第一に、こんな話をのせる。

顧況在洛乘門　与三詩友遊於苑中　坐流水上　得大梧葉　題詩上曰　一入深宮裏　年年不見春　聊題一片葉　寄与有情人　況明日於上游　亦題葉上　放於波中　詩曰　花落深宮鶯亦悲　上陽宮女斷腸時　帝城不禁東流水　葉上題詩欲寄誰　後十日余　有人於苑中尋春　又於葉上得詩　以示況　詩曰　一葉題詩出禁城　誰人酬和獨含情　自嗟不及波中葉　蕩漾乘春取次行

一篇の小説を読むような面白さである。『四庫提要』は、話のつじつまの合わなさから「七属不經」フィクションだときめつける。フィクションかどうかはともかく、こんな話の主人公に擬

せられるような面が、顧況には、あったのであろう。そうして、そんなところが、官吏社会では「不修校操」と非難せられることにもなるのであろう。

顧況が山水画にたくみであったことは『名画記』等にもしるすが、「聚角思師」その他の詩にしばしば詠ずる、青苔と黄葉との照應の美しさからも、それは想像しうることであった。『名画記』はさらに、顧況に『画評』のあったことをのべている。単に絵筆をとるのみでなく、描かれた絵や、描く画家を品隲する、批評家的性格のあったことを、物語るものであろう。

その批評が「未為精当也」とは、これまた『名画記』の批評である。今日『画評』が残っていないので『名画記』の批評をそのままにうべなっておくほかはない。だが「梁広畫花歌」「楷山道芳上人畫山水歌」「杜秀才画立走水牛歌」などの詩があるので、彼の批評の性格を想像することもできる。

彼の詩に、批評家的性格が多分に存したことは、彼の人商や詩業について考えるとき顧慮してよいことであろう。批評家的性格の勝った人は、作家としては第二流であることが多い。多分、才一流の作家ならば作品の製作に専注するエネルギーを、批評というジャンルに分注するところから起る現象なのであろう。ところで、批評家として活動する作家は、批評というジャンルにエネルギーを専注する批評家にくらべて、その批評が精当を減ずることのありがちなのは、これまた同様の理由によるのであろう。

「聚角思師の感傷を知る人には、偉に見える談論を、そぐわないものと感ずるかもしれない。が、とにかく、彼は、皮肉屋であり　感傷家であった。同じタイプを、われわれはハインリッヒ

・ハイネに見ることができよう。彼らの内部には、批評家と作家とが同居していて、その批評家が、彼らに皮肉をいわせ、その作家が、彼らに感傷させるのかもしれぬ。けれども、また、皮肉家と感傷家とは、同じ性格の二面にすぎないともいえる。感傷を知らないような現実的な人ならば、皮肉をいったり批評をしたりするひまに、その対象を、おのれの思うままに処置しているだろうとも考えられるからである。

初為韓晉江南判官　德宗時　柳渾輔政　高為秘書郎　況素善於李泌　遂師事之　得其服氣之法　能終日不食　及泌相　自謂當得重官　久之遂著作郎

顧況の官吏生活は、韓晉江南の判官となることにはじまった。韓晉江南とは晉国公・江南観察使韓滉（七二三―七八七）のことであり、判官はその属僚のことをいうのである。『旧唐書』『名画記』に韓滉の伝が見え、詩話・小説のたぐいが好んで記録するように、軼事の多い人物である。ここには簡潔な『名画記』の記事を引いておこう。

韓滉　字太沖　官至金紫光禄大夫　測度西両道節度使　左僕射　同平章事　封晉国公　貞元三年　年六十六　贈太傅　謚忠肅　工隸書草　雜畫頗得形似　牛羊最佳

韓滉が蘇州刺史浙江東西都団練観察使となったのは、『資治通鑑』によれば、大歴十四年（七七九）閏五月で、顧況は五十五歳である。もしこの年はじめて官吏となったとすれば、進士に登第してから二十年余り野にあったことになる。しかし、そうではなく、登第してまもなく韓滉の属僚になっていたのであろう。

顧況には「寄兵部韓侍郎奉至李戶部盧刑部杜三侍郎」と題する詩がある。この韓侍郎は韓滉で

ある。韓滉が兵部侍郎になったのは大曆五年で、翌六年には戸部侍郎に改められているから、詩の製作は、その間のことである。大曆八年正月「祭陸端公文」をつくり、文中に「正月朔　同郷顔況　於水部発使　具筵蔬野酌　敬祭陸三十二兄端公之靈」の語が見える。同じ年「在浮苦雨時拙花蕊偶親友略尽」「龍宮指掌」を作った。

柳渾や李泌と知りあった年は明らかではないが、韓公の幕下にあったときのことであろう。顔況の詩に「晉公魏國夫人柳氏挽歌」と題するものがある。柳渾は、あるいは韓滉の夫人の兄弟でもあったろうか。

「德宗時　柳渾輔政」というのは『通鑑』に「以左丞柳渾同平章事」と記す、建中四年（七八三）十月のことであろうか。柳渾は、おのれが台閣に列すると、友人の顔況を中央にまねいたのであった。傳では、その招きにただちに應じたような書きぶりだが、顔況には、「酬柳相公」なる次の詩があって、一旦ばこばわっているのである。

天下如今已太平　相公何事喚狂生　箇身恰似籠中鶴　東望滄溟叫數声

柳渾は、顔況の才をおしんで、強いてすすめて秘書郎としたのであろう。顔況もまた、ことわりはしても、内心は中央の清官につくことを望んでいたのであったろう。あるいは、秘書郎以上の顯官をひそかに期待しての辭退であったかもしれない。

秘書郎は秘書省に屬する。定員四人で、その位は從六品上、月俸五千三百文というから、まことに注給ではあったが、地方官の爲体をしているよりは、昇進の見通しも明るくなったわけである。

李泌が中書侍郎同平章事となり、正式に政治を担当したのは、貞元三年（七八七）六月のことである。李泌は幼時から唐の皇室と親密な関係にあり、肅宗・代宗・德宗の三代の天子に深く信頼されたが、自身は権勢欲がなく、早くから黄服をまとって仙術を嗜み、朝列につこうとはしなかったのである。その立場にあれば、どのようなことでも出来たろうが、彼は、全く公平無私であった。このことは『新唐書』『旧唐書』『通鑑』いずれの記事からもうけとる印象である。彼が、親友でもあり、弟子でもあった顔況を推薦しなかったのは、政治家としての資質に缺けるところがあると、判断したためであろう。

『旧唐書』の顔況の傳には、「其所結交　皆時之儒秀　非公直者　不与之親密」という。その韓況に長く信任されたからには、顔況もまた公直であったに違いない。ただ、公直なるものは、必ずしも、政治家として有能であるとはかぎらない。杜甫はそのよい例である。顔況に対する李泌の評価も、まずこういうところであったと　考えられる。

それでも、後には、著作郎にうつった。著作郎は秘書省著作局に属し、定員二名で、從五品上、月俸九千二百文。秘書郎にくらべれば経済的にはややゆとりはできたものの、友人がそれぞれ大臣となっていることを思えば不満にたえなかったのであろう。

なお、貞元十六年、すでに退隠していた顔況の書いた「宋陵公墓記」には「前秘書著作郎顔況記」としるしながら、翌十七年に書いた「茶聚監記」には「前秘書省著作佐郎」と記す。いずれが是なのであろうか。もし著作佐郎であったとすれば、品秩・月俸ともに秘書郎と同じで、変りばえがしなかった、ということになる。

反沁李　作海鷗詠　咏詩格賞　大為所嫉　被害劾　貶饒州司戸　作詩曰　萬里飛來為客鳥
曾巢丹鳳借枝柯　一朝風去梧桐死　滿目鴟鳶奈尓何　遂全家去　隱茅山　餘金拜斗　身輕如
羽

顔況がなくなったときには、その死をいたんで「相國晉公挽歌二首」をつくり、太常博士李紹
暢に代って「太尉晉國公請謚議」を書き、更に「換授尚書左僕射同中書門下平章事上柱國晉國公
贈太傅謚公行狀」を撰している。顔況が、貞元五年三月　李泌のなくなったときには　亟前に奏す
ることもせず、權門貴戚を嘲笑するような言動がやまないため、ついに貶謫され、饒州司戸參軍
におとされた。

饒州は、今の江西省の鄱陽湖東南のまち鄱陽である。のちに白居易が流されて、そこで「琵琶
行」をつくった江州、いまの九江とは八〇キロメートル位しかへだたっていない。

顔況は赴任の途次、蘇州・杭州・睦州に立ちより　それぞれの州の刺史の宴に招かれている。
劉太眞に「顔十二況左遷過韋蘇州　孝杭州　韋睦州　三使君　皆有郡中燕集詩　辭章高麗　鄙
夫之所仰慕　顔生既至　留連笑語　固以成篇　以繼三君之風焉」と題する詩がある。「留連笑語」
の四字には、落魄してなお議論をやめないこの老詩人の、内に感傷をたたえながら外に狂儀をよ
そおう姿が、まざまざと眼にうかぶように、著しい。なお、詩題にいう韋蘇州は、詩人韋應物で
ある。

顔況が饒州司戸參軍におとされたのが、李泌の死後まもないこととすれば、貞元五年中のこと

であろう。貞元九年八月庚申に「饒州刺史趙郡李府君慈誌銘」を書いている。なお司戸参軍だったのであろう。この年、すでに六十九歳であった。彼の退隠は多分この前後のことであろう。韋夏卿に「送顔況歸茅山」と題する詩があって「聖代為逐客　虛室作近臣　法尊孫大洞（著作已受上清聖法）　学淺茅初真……」の句が見え、蔡母誠の「同韋夏卿送顔況歸茅山」詩に「諸官問嘗賦　遊仙復作詩　白銀雙闕想　青竹一龍騎　先入茅君洞　旋過葛稚陂　無然別鑾客　五日有還期」とあって、当時の顔況が、上清聖法なる道教の仙法を学びおそれていたこと、さらに、どのような感懐をもって山に入ろうとしていたかを、想像させるよすがとなるのである。

顔況が晩年を送るべく入ったという茅山は　今の江蘇省句容県の東南にあって　本名を句曲山といい、漢代に茅盈とその二弟茅固・茅衷とがここで仙人となったので、三人を三茅君といい、山の名を三茅山、または茅山といったのである。山には大茅峯があり、その峯に華陽洞があって、三茅君が得道したところといいつたえ、梁の陶宏景もここにかくれたという。顔況が「華陽真逸」と名のったのはこの華陽洞にちなむ。高木正一『唐詩選』が「晩年は、盈を都の東、華山の下に結び、華陽真逸と号して」というのは、あやまりである。

況慕年一子即亡　追悼哀切　吟曰　老人長愛子　日暮泣成血　老人年七十　不作多時別　其年又生一子　名非熊　三歲始言　在襁褓中　聞父吟詩　不忍　乃來復生　非熊後及第　自長安將度　已不知況所在　或云　得長生訣仙去矣　今有集二十卷伝世。皇甫湜為之序

ここに引かれた詩は「傷子」と題するものの節録で、全詩は次の通りである。

老夫実愛子　日暮千行血　聲逐斷猿悲　腸隨秋鳥滅　老夫已七十　不作多時別

また「大茅嶺東新居憶亡子從真」なる詩がある。

谷鳥猶呼兒　山人夕霑襟　懐抱隔生死　恨矣從登臨　東門愛不入　西河盈亦深　古来失中道
偶向経中尋　大象無停輪　倏忽成古今　其矣非不幸　鉄形由太陰　凡欲撃雲階　譬如火鑽
金　虚室留旧札　洞房掩閑琴　象涙登方諸　上有空青林　彷彿通語嘶　蕭寥幽微音　軟草被
汀洲　鮮雲暗浮沈　頽景宣疊震　紺波響飄淋　石窟含雲巢　迢迢耿南本　悲恨自茲斷　情歴
詎能侵　眞靜一時変　坐起唯從真

顧況は仙道を学んだとはいってし、肉親の死に臨って、缶をうって歌いうるような達人ではなかったのであろう。悲恨自茲断とは、断とうとして、断ちえざるかなえに、くどくどと、断つべきことわりを、おのれに言いきかせているのであろう。そういう人であればこそ、七十をこえてなお子どもをもうけているのである。御非能出生にまつわる物語は『四座講式』が「其事怪誕不足信」と、一言のもとに否定し去っている。たしかに不経ではあるが、しかし、この物語の中には、顧況の人間像が生きている。その文学の重要な一面が描かれている。

書人の撰した伝記・詩話等が、しばしば怪奇な談をまじえるので、今日では、その信憑性を疑うのが普通となっているようである。従って、そうした怪奇の談は、今日書く伝記からは抹消することが科学的だと考える傾きにあるようにも察せられる。

だが　これらの怪奇談を、その主人公の作品とあわせ考えるとき、不思議なほど、その作品の

本質をつく場合が少くない。李商隠のかいた「李長吉小伝」はその一例であり、顧非熊出生談もまたそうであるように、わたくしには考えられる。

唐人は、理におちた評論をきらって　傳記や小説におのれの批評を託し、そこで必要ならば、話の怪奇にわたることをも嫌わなかったのではないか。唐人のこのような批評は、自然科学的な厳実を傳えることはないであろうが、心理的真実を傳える点では、近人の傳記や評論よりもはるかに高いものではなかろうか。

以上で『才子佳人』の記事についての説明は終ったが、最後に顧況の詩を一つ引いておこう。

我欲昇天天隔霄　我欲濯水水無橋　我欲上山山路険　我欲汲井井象遥　越人翠被今何夕　独立沙辺江草焦　紫燕西飛欲寄書　白雲何処逢赤客

悲歌其二

現存する作品から察すると、顧況の文学者としての活動は、徳宗の治世で終ったようである。彼は、その後なお十年あまりは生きていたのであろう。

その晩年の十年間は、一方、白居易が最も花々しく活躍した時期であった。元和文壇の寵児の記憶からは、かつておのれが詩巻を捧げた老詩人のおもかげは、あとかたもなくなっていたのであろうか。そうして、最初の政治的蹉跌のうちに「琵琶行」をつくったときにも、その人のことを想い起すことはなかったのであろうか。

そのような白居易を、顧況は、いかなる思いで眺めていたであろうか。

もはや、仙山に、塵世の葛藤を忘れて、茫茫と去来する白雲を友とするのみだったのであろうか。

つくられるや、ただちに人々の口から口に傳えられた「琵琶行」を、この老仙は、なお耳にしたのであろうか。あるいは、その成る前に、この世を去っていたのであろうか。

五

grand poet は、必ずしも独創的であることを要しない。grand poet もまた、時として独創的ではあるが、独創的であることによってのみ、その存在がみとめられるような詩人は、minor poet である。

grand poet とは、古今の minor poets から、その独創的なものを貪欲にうばいとり、おのれのものとして消化し、俗衆に appeal する形に加工して、大量に売り出しうる詩人を、いうのである。

白居易は、典型的な grand poet であった。彼にくらべると、杜甫などは、なお minor poet たることをまぬかれない。杜甫が grand poet としてみとめられたのは後代にいたってからのことで、在世中には弟子もなく、死後も長く田舎詩人としていやしめられたのである。今日その名声は、あるいは白居易をこえるであろうが、作品の親しまれる度合からいって、やはり白居易には及ばないであろう。

白居易と元稹との交情は恋人同志もおよばないものがある。けれども、元稹のために書いた墓志銘の潤筆料に五六十万の大金を受取ることを悔らなかった、と、清の篤儒趙翼が指摘している。白居易は、また、しばしば清貧をうたったけれども、晩年楽隠居をたのしみうる境遇だった。このような人でなければ、生前に grand poet の名をかちうることは難いのであろう。

顧況は、これに反して、生涯貧乏であった。その中で、俸給の大半は書物にかえたといわれる。彼のような偏狭な性格の持主が grand poet となりえなかったことは、当然である。minor poet は、いわば、一人の幸寺たる grand poet を生み出すために、その土壌をこやす雑草に似ている。顧況が、忘れ去られるとしても、ちゃしむべきことではない。

grand poet 白居易の行列にぶつかれば、わたくしは路傍の人として、帽を脱するに吝かなものではない。ただ、行列の去ったのち、踵をかえして、後後になお夢を追うて徘徊した minor poet 顧況の墳墓を訪ね、石上の苔を拂い、一杓の水を注ごうとするのである。

（一九五七・九・一一　一九五八・一・一二）

潘岳の評價について

原田 憲雄

潘岳（ママに　二四七～三〇〇）の「悼亡詩」は、学生時代に何度か読んだが、ほとんど心にとめることもなかった。一九五四年、妻を喪ったのち、『文選』を読んでいて、この詩にぶつかったとき、はっとした。その世界が、何の滞りもなくわたしを占め、わたしを感動させた。それから、一週間ばかりの間に、大した苦労もなしに、「悼亡詩」三首をあらまし翻訳した。拙訳中国詩選『幽欽集』（一九五六年・方向社刊）に収めたものは、これに少し手を加えたものである。

さて、潘岳はいったいどんな経歴をもつ人だろうと思って、『漢魏六朝一百三名家集』所収の彼の詩文集『潘黄門集』全部と『晉書』と、『資治通鑑』の「晉紀」と、『世説』に散見する彼に関する記事とを読んだ。彼の生涯を知ると、「悼亡詩」三首もにわかに色あせる思いがした。何というつまらない奴だろうと思ったのである。

けれども、くりかえして読むうちに、その感想が少しずつ修正せられるのを覚えた。これも面白いことである。

そこで、ひとびとが潘岳に対してどのような評価を下しているだろうかと思って、目にふれる限りのものを読んでみた。人物評価については、ほぼ一致している。作品については賛否さまざ

までである。批評する人の立場が、それぞれにあらわれていて、これまたなかなか興味がふかい。概して批評家の採点は辛く　詩人は好意的であるように見うけられる。褒める方は、ここでは、とりたてていうこともない。くさす方では、例えばこういう批評がある。陸侃如・馮沅君『中国詩史』中、に見える。この『中国詩史』は一九五六年重印本である。

① 然而三張二陸兩潘的作品實在沒有很高的価値。

② 潘陸是低能詩人，而左思是曹陶間一大作者。

③ 他的詩與陸詩是同樣的不高明。是出名的是悼亡詩：（中略）這些還可表示一點哀悼的深情。第三首使並得遠，即第一首中，也有『周邊仲驚剛』一類不好的句子。悼亡以外的幾首，更不用說了。

陸・馮両氏の評価は、ほとんど理由をのべずに、結論だけが与えられている。その点、清朝以前の多くの詩話とよく似ている。①②についても、理由は記されないが、それが両氏の見識に出るものである以上、文句をつけることはない。ただ③の「一類不好的句子」は看過せないと思った。

両氏の掲げられたテクストが何だったか知らないが「仲驚剛」は困るのである。その上の「周邊」は『玉台新詠集』（明覆山趙氏刊本影印）には「四邊」とする。だがこの三字は「仲驚悔」である。わたしの見たかぎりでは、『文選』の諸本も、この点ではかわりはない。

「周邊仲驚剛」ならば、たしかに意味をなさない「不好的句子」であろう。「周邊仲驚悔」は不好どころか、この一首中で、感情が頓挫し転調するところである。その頓挫は極めて重要で幻のように見えたとおもった妻を、いや死んでしまったものが、見えるはずかないと、思いか

えし、眼を外へむけて、次の「如飛翰林鳥　雙栖一朝夏　如此游川魚　比目中路析」、をひき出してくろ鍵の役目を果していて、作品効果からいっても　実によくきいている。

「仲」「別」二字が誤植ならば「仲驚惕」がなぜ不好であるかを聞きたいし、もし誤植でないなら、なぜ多くの本に見える文字をとらずに、ことさらに不好な文字をふくむテキストを採いたか、その點を聞いてみたい、と思った。

次に、潘岳の詩が高明でない、という點である。人物の不高明はいうまでもない。そして、その詩も多くは高明ではあるまい。ただ次のようなことは、言い充ないであろうか。

中國の知識人は、友情をうたうとき、恋人に対するような濃厚な感情を表現することを憚らないが、妻に対する愛情をうたうことは、極めてまれであり、そのまれな場合にも、おおむね淡々としているように見うけられる。これは、中國人の女性観乃至は妻なるものに対する普遍的な感情にもとづくのであろう。

それはそれで一つの態度であろうけれど、男性同志の友情を濃厚にうたうならば、妻に対する愛情を濃厚にうたってさしつかえはあるまい。

もっとも、夫婦の愛情というものは、友人や恋人に対する愛情とは異質のものである。それは、ことごとしく歌うよりも、家庭の中にしずかに温めておくにふさわしいものではあろう。しかし、中國の知識人たちが妻に対する愛情をうたうことを憚ったのは、かならずしもそうした深い思慮に出たものではなく、女性一般を、殊に妻を、道具のように考えて来た、中國人の人間観に根ざしているように、わたしには、感ぜられる。もしこのわたしの感しかあやまっていないならば、

中国の知識人の人間観には、歪みがあった、といってよいであろう。

潘岳は、不高明な人物ではあったが、少くとも「悼亡詩」三首は、中国の傳統詩人にほとんど普遍的であった、こうした人間観の歪みをうちやぶっている。潘岳以後、詩人の間では、妻の死をいたむことを憚らない傾向が、徐々にひろがっている。後代の妻をいたむ詩の作者が、潘岳の影響にあろことは、その詩のほとんどすべてが、潘岳のそれと同じく「悼亡」と題することによって知られる。潘岳以前においては「悼亡」の語で妻の死をいたむ意味をあらわすことは、必ずしも普遍的ではなかったようで、『文選』の注家によれば、漢代の『風俗通』という書物に、はじめてこの文字が見えるという。そうした文字が、一般的になったことは、潘岳の『悼亡詩』に、人間感情がのびゆく方向を予言する「高明」が存したからだ、とは考えられないであろうか。

潘岳の悼亡詩も、手本があった。漢の武帝の「李夫人歌」と「絳蕖晨鶴曲」がそうだ。だから妻の死をいたむ先覚の名は、むしろ武帝に帰すべきである。こういった反論がでるかもしれない。けれども、李夫人は、いわば妾であって、妻ではない。また、李夫人に対する武帝の哀悼追悔の思いそのものが、実は、李夫人の周密な計算から生れたものであった。『漢書』の「李夫人傳」はそのことをはっきりと語っている。武帝の婦人観に、中国人の人間観を是正する要素は、見出し難い、と私は思う。

これに対して、潘岳の　要揚氏に対する感情の中には、その生前から、對等の人間として、尊重しているところがある。彼の「内顧詩」は、これを証しするであろう。妻に対するこのような態度は、むしろ女々しいものと考えるのが、中国人の一般的な感情であるようである。潘岳が女

性的な詩人とよばれる理由の一班は、そこにあるのであろう。彼の耳にも、現にそのような批評が届いていたことであろう。そうして、時として、おのれを〝男性的〟な詩人たらしめようと決心することもあったであろう。「悼亡詩」の中の「莊缶猶可聖」「上書蒙門長　下愧蒙莊子」などの句は、そのような努力の跡である。にもかかわらず、彼は、ついに、女々しい詩人として、妻の詩をいたむおもいを、うたいあげた。

文藝が、倫理や道徳と違って面白いところは、悪人からでも逸楽児からでも、すぐれた作品の生れる可能性がある、という点である。倫理の場では絶対に許されない人間も、たまたまある機会があたえられ、そこに彼の才能がむすびつくとき、すぐれた作品を生みうるということ、そうしてその作品によって、不高明な作者もこの世界に存在することを認められ、また高明な人々によっても政められることのなかった社会の偏見が反省せられ、是正せられるということ、これこそ、文藝がいつの世にも親しまれ、人間の救いとなって来た理由ではないか。フランソワ・ヴィヨンの『遺言詩集』ボードレール　ヴェルレーヌの『叡智』はそういう作品であった。潘岳の「悼亡詩」もまた、そのような詩の一つであると、わたしは思う。

潘岳は不高明な人物であった。この不高明な人物に「悼亡詩」三首があることによって、わたしは、人間を信頼するのである。潘岳もまた、おのれの作った「悼亡詩」によって、救われているように、考えられる。

文藝はかならずしも人間救済をめざすものではないであろう。しかしながら、直接「救済」を目的としないだけに、文藝の人間救済は、微妙であり、具体的であるように、思われる。

清朝以前の批評家が、潘岳の作品を「不高明」と片づけてしまうことには、わたしは何もいうところはない。新中国の批評家には、新しい人間観に立った評価を期待してもよいであろう。陸・馮両氏の評価はすでにのべた。両氏とは違った観点に立つ、新しい批評家は、潘岳を、どのように評価するであろうか。

（一九五七　八、三〇）

附記

潘岳を本論したものは、近ごろまで皆無といってもよい状態であった。潘岳は、本論するに値せぬ詩人であろうか。もしそうでないとすれば、これを放置しておくことは、中国文学にたいする怠慢ではないか。わたくしが『潘岳小傳』を書きはじめたのは、一つには、こうした考えがあったからである。『潘岳小傳』は、上、中を書いて、下はなお書き終えていないが本稿は、その間の副産物である。

一九五七年十月、京大中国文学研究室発行『中国文学報』第七冊に、高橋和巳氏が「潘岳論」を発表された、頗る詳密深切で、敬服した。

ただ、本稿の主題とする点については、高橋氏は触れておられないので、粗漏な感想ではあるけれども、発表して、博雅の示教をあおぐこととした。

（一九五八・七　五）

マックス・ピカート

『ゆるぎなき結婚』読後

原田憲雄

―訳者佐野利勝氏に―

はじめに

思いがけなく、草訳『ゆるぎなき結婚』（マックス・ピカート著）をお意みくださいまして、まことにありがとうぞんじます。微意の涙で拝誦しはじめましたが、巻をおくにしのびず一気に深了、深い感動につつまれています。

この本は、いくたびも、心を潜めて読み返さるべきであり、読み返すたびに、新たな意味を見出す本でありましょう。忽卒に感想をのべることは、「時間をかけて見入る」ことを教えるこの本に対しては、安らかならぬこととぞんじます。

ただ、わたくしにとっては、この本は、全く見知らぬひとのようではありません。この中にとりあげられたいくつかの問題は、いまなお未解決ながら、ともかくわたくしみずからの問題として、かんがえたものであり、この本の著者と親しいリルケは、わたくしが少年のころから、仰ぎ見てきたひとです。従って、この本をただひとたび読みすごしたのみのいま、わたくしの心に浮びあがった感想とはいえ、そのうちのいくつかは、あるいは独断にとどまることをまぬかれてい

ようかともぞんじます。

幸い、拙いことばをもいとわず、おもとめくださいました貴意に甘えて、小感をのべさせていただきます。

1　形　象

真の形象ならば、その現象形態の背後に必ず「それ以上のもの」が蔵されているのだ。p.29

それ以上のものが蔵されている、ということばは、そっくりそのまま、この本をあらわすことばとすることができるように、わたくしには信ぜられます。

わたくしの感想は、この本の主題とは一見かかわりのないような形でのべられることが多いかとぞんじますが、この本の「それ以上のものを蔵する」という根本的な性質とかかわるもの、と御諒察いただけましょう。

2　信　仰

現代の人間のひとつの特徴は、信仰を忘れたところにあろうかと、思います。いな、むしろ、信仰を捨てたところに、現代人の知識が成り立っているようにさえ、感ぜられます。現代人は、信仰を捨て去ることによって、人間を神から奪還した、と思いこんでいるようです。

教会や寺院は、閑散となり、それらはただ、死に近づいた老人の慰安所、死者を葬るための辻堂にすぎないように、考えられ、牧師や僧侶の中にも、そう感じて、あわてふためく人が少

くないように見受けられます。あわてふためくからこそ、教会や寺院が、百貨店のような宣伝にうきみをやつすことにもなるのではないか、と考えられます。

今では信ずることのできなくなった人間のために、教会が信仰している……　P.33

そうです。教会や寺院は、信ずることのできなくなった人間のために信仰するのです。これは祈るということになるかと思いますが、祈るためにこそ、存在するのではないでしょうか。

そこ（修道会）では他のこと、例えば宣教も重要なものではある。しかし宣教はいわば祈からのほんの賜暇のようなものでしかないのである。　P.79

修道僧 ― 修道会 ― 教会。この関係はデリケイトで、しかも厳然たる区別があるはずですから、これを混同したような私のいい方は、あるいは非難をこうむるかもしれません。が、教会の使命の主要なものに、祈りを、ことに、信ずることのできなくなった人間のために信仰することを　数えることは、不当なものとは、考えられません。

法華経のなかでは、提婆達多が成仏していますが、これこそ、信ずることのできない人間提婆達多のために信仰した釈迦の祈りを、語っているもののように、受けとられます。

3　存　在

結婚のなかにあるもの……それは一人の男と一人の女、何人かの子供、食べたり寝たりするための僅かの家具什器、そして恐らくは二三匹の家畜、ただこれだけのものである。世界創造のはじめには丁度そのようであった。しかも世界創造のはじめから、今日に至るまで、

常にただこれだけのものが、結婚家庭のなかに存在していたのである。 P.11

巻頭に、この数行を読んだとき、わたくしは、戦慄に近いものを覚えました。それは、流動してやまぬものが、不動のものに突き当ったときに覚える一種の感動から生れたものです。この不動のものを何と名づけべきか、わたくしは知らなかったのですが、読み進むうちに、明確な名で指し示されていることを知りました、それは「存在」だったのです。

結婚のなかにあるあらゆる事物は――生成するものとしてではなく――存在するものとして、そこにある。そして結婚自体もそのように、つまり存在するものとして、そこにあるのだ。このことが夫と妻とに存在するもの一般への確信をあたえるのである。まことに、万事がただ生成するばかりで流動して止まず、絶之間のない進展のなかにあるこの現代世界のなかに、微塵微尾存在的なるもののうえに基礎づけられた少くとも一つの現象があることは、きわめて必要なことなのである。 P.37

流動してやまぬ現代世界に生きる人間にとっては、バイブルの世界も、俳句の世界も、非現実の世界のように感ぜられます、そこにあらわれるさまざまの事象が、荒唐無稽の神話にすぎないように思われます。そのことが、物質的合理主義にのみ馴れた現代人を、更に無信仰に追いやるのでしょうが、それこそ、

この形象なき不眠症的現代世界のなかでは、今なお形象として存在しているものは夢と眠りの世界に属するもののように思われる。 P.30

不眠症患者の倒錯した認識にすぎないのでしょう。

4　旅

その歩き方で結婚している人を識別出来ることも珍らしくはない。結婚のなかに生きている人は、ただ目標に達するために歩くというのではない。前方へうごくたびごとに、足がふたたび地面に触れるにさきだって殆ど感じられないほどわずかな休止がそこにはある。それはあたかも、彼が出発したもとの場所へ――とりもなおさず結婚家庭へ――ふたたび戻るべきかどうかを熟考しているかのようなのだ。歩調はだから静かで落着いていて、決して押つけがましくはない。 P.47

わたくしはこの一節を読んでいて、三木清氏の「旅について」というエッセエを思いおこしました。このエッセエは、三木氏の多くの著作のうちでも、殊に美しい文章だと思いますが、その中に、次のようなことばがあります。

旅は過程である故に漂泊である。出発点が旅であるのではない。到着点が旅であるのでもない、旅は純粋な過程である。ただ目的地に着くことをのみ問題にして、途中を味ふことができない者は、旅の真の面白さを知らぬものといはれるのである。（創元選書『人生論ノート』一八九頁）

旅行者の歩行が結婚者の歩行と同じであるのは、そのいずれもが「成ること」を前程とした歩行であるからなのでしょう。

世界の終りは遅し行い彼方にあり、また世界の開始も遅しない彼方にあるのだから、結婚はつねに中心にある。（中略）結婚は世界の発端と終焉とによって支えられている。 P.12

ように、旅もまたつねに、出発と終着との中心にあり

夫と妻とが結婚のなかでなすところのことは決して結婚への運動ではなく、それは結婚自体の運動……　P.109

であるように、人が旅のなかでなすところのことも、旅への運動ではなく、旅自体の運動だ、というような、両者の構造上の相似によるのでもありましょうか。

このように相似た構造をもつ二つのものに、しかしながら、また　はっきりした相違も見出せます。結婚者の歩行が「静かで落着いている」に反し、旅行者のそれが、つねに「あわただしさ」をともなっている點です。同じように中心にありながら、一は恒常の感情を、他は漂泊の感情を伴っている點です。

こうした相違は、結婚が、夫と妻とによって成り立ち、

結婚家庭の中では夫（単独者）が　妻（普遍者）と融けあうことによって、夫も妻も具体的になる。　P.101

に反して、旅は本来「脱出の感情」であり「遠さの感情」であり　単独者が孤絶の中に逃走することによって審美的になるものです。両者の相違は、こうしたところから生れるように思われます。つまり　結婚は「求心的」であるに反し、旅は「遠心的」であるのでしょう。

人生は旅、とはよくいはれることである。芭蕉の奥の細道の有名な句を引くまでもなく、

これは誰にも一再ならず迫ってくる。　人生論ノート　一九二頁

たしかに「人生について我々が抱く感情は、我々が旅において持つ感情と相通ずるものがある」

可。しかしながら、人生と旅とは、必ずしも同じものではありません。それは丁度、結婚と旅とが、ある面では近似しながら、ついにはおなじでないのと同様です。

ただ、芭蕉にあっては、たしかに、人生は旅、であったように思われます。芭蕉は、人生が旅であることを その生涯をかけて立証してみせました。それが、芭蕉の偉大さです。けれども、その限界もまた、そこにあった、と考えられるのではないでしょうか。

芭蕉の藝術には、一種特異な孤獨性があるようです。すぐれた藝術家には、孤高者がひとしく負うべき孤独感がつきまとうものですが、そして、もちろん芭蕉にもそれが濃厚ですが、わたくしがここにいう一種の孤独性は、それとは違ったあるものです。そうして、それは、

一人の男、或いは一人の女が結婚を捨て去れば、主観性が激しく立ち現われる。[19]

そこ「主観性」とかかわりがあるように感ぜられます。

このことは、同じくその生涯を旅に送った杜甫 ― 彼もまた時として、人生は旅であるという に近い表白をし、孤独者としての思いをうたってはいますが ― 杜甫の藝術と比較してみるとき、芭蕉の主観性がかなりあらわになってくるように思われます。一つ例をあげてみますと、吉川幸次郎氏が「杜甫小伝」（新潮文庫『杜甫ノート』ニ頁）に指摘しておられる「芭蕉は旅に死すること を 肯定し讃美している。杜甫はそれを嫌悪した」ことの中に、それが見とられるように思われます。

旅は、もと 帰ることを前程としています。旅に死するとは、その前程を破ることです。この前程破棄に「主観性」を看ようとすることは、当っていないでしょうか。芭蕉は、同行・門人の

間にあってさえ孤独であったように思われます。杜甫は、ひとり旅にあるときにも、孤独ではありませんでした。

芭蕉の藝術と杜甫のそれとの相違は、結婚を捨て去った人と、結婚者との、相違だ、とはいえないでしょうか。

5　降　下

今日では、世界は下から上へと築かれている。しかし上部はそのもの固有の存在を充分に持っているわけではない。上部は、自己がそこから由来した下の方へと絶えず間なく崩壊してゆくのだ。P49

下から上へと築き上げてゆく精神の動きを、中国では「危」と批評します。下から上へと、築き上げられる精神は、高さをもつと同時に孤立し、尖鋭となり、そうして常に顚落する危険を、予想させるからです。

「危」が、ことばにあらわれるときには「詭」となり、「詭」は、ほとんどつねに「怪」や「語」の語之、結びついて「怪詭」「詭語」となるように グロテスクな様相を帯びます。このグロテスクこそ、正に、

今やこの客観的なものが傍にないとなると、主観性は自己のそばに生じた真空の空間のなかで猛烈に増大する。実際、猛烈に増大するのである。そしてグロテスクになるのである。P47

の「グロテスク」と同じ性質のもののように思われます。このような危的性格をもつものを、中

国の社会では、ほとんどいつの時代でも、異常なものとして拒けて来たようです。

上から下の方へと、事物のところにまでうごいてくる精神は、すべてを所有しており、そしてすべてをもたらすのである。だから世尊は、上から下へのこの運動によって一層豊かになるのだ。（中略）ただ愛のためにのみ精神は上から下へとうごいてゆくのである。それは慈悲のための運動であって目的のための運動ではないのである。 P.51

そしてまた、精神が低次のものの許にとどまるというこの思寵が重大なのであって、精神が低次のものに向ってうごいてくるその運動が重要なのではない。ここでは存在が、静止が、運動よりも重要なのである。

地蔵菩薩は、ことにすぐれた菩薩でありながら、普通の修行僧のような姿をしているのは、仏・菩薩を、あまりにも高くて絶縁せられたものと感じる迷妄の衆生を救うために、衆生と同じ低位にとどまりつづけることを意味するのだ、といわれています。

阿弥陀仏は四十八願の誓願をしているので有名ですが、そのうち殊に重要なのは第十八願であって、それは、十方の一切衆生が成仏するまでは、おのれもまた仏となるまい、という誓いだとされています。

妙法蓮華経は、天上に咲くべき蓮華が泥中を離れぬことを示し、またこの経中にあらわれる菩薩が、つねに最低処に存在しつづける人、すなわち地涌の菩薩として象徴せられているようです。

菩薩の上から下への運動を、浄土系仏教では、選相廻向（ぜんそうえこう）ということばであらわしているようですが、このような術語ではすでに多くの人々には理解されがたくなった、慈悲のための運動が、

ピカート氏によって澄明に説かれているのを知って感嘆せざるをえないのです。

精神が低次のものの許にとどまるということは、さきの老子のことばでいうならば「天下の雌に居る」ということにも通ずるように考えられます。もっとも、このことばは、一般には、極めて消極的な厭世法と解されているようですが、ともあれ、仏教でいう「空」も、老子の「無」も、それはnothingでもzilchでもなく、生気に充ちながら静止しているあるものですが、それが静止しているのは、まさしくピカート氏のいわれるように「慈悲に由来」しているのであろうと考え、られます。

このような上から下への運動が、時間的にとらえられると、末世のための教えが成立し、対象的にとらえられるとき、凡人のための教えが成立し、そしてそれらの教えのなかにいる人間は、救済さるべき人間ではなく、救済された人間 P.55

であり その教えの中では

殊更人間が骨を折るまでもなく、ほとんど人間の意志に反して、神聖なものは彼のもとに降りてくる。 P.57

ことが、実に意味深く、思われます。

6 詩と体験

上から下への運動が普遍的な世界では、その中にある下から上への運動も

落着いた用心深いものになる。 P.55

「危」が、中國の社会でつねに「批評」としての位置をたもちえたのは、「危」ならざるものが普遍的であったからだ、と思われます。ところが反対に、「危」なるものが、社会現象において普遍的になるとき、「危」ならざるものがかえって危的相貌を帯びはじめるように思われます。現代はそのような時代であり、そして、そのゆえに、青年の目をもって迎えられるのではないかと　あやぶまれます。このことは、こんにちリルケの詩が、多くの読者を持つようにはなったけれども、その読者にさえも、危的相貌を帯びた孤独の詩のように感ぜられているらしいことと、つながっているように、思われます。

近代の大抵の詩は、下から上へと構成されている。それらの詩は詩句によって初めて生ず、る。それらの詩は詩句のなかで発生するのである。詩人は彼の詩の一部を成すべきさまざまな部分を探しあつめ、それらの部分から次第に一つの世界を構成するのである。詩人は彼の詩の一部を成すべきさまざまな部分を探しあつめ、それらの部分から次第に一つの世界を構成するのである。

今日の詩の、不毛といわれるゆえんは　恐らくこうしたところにあるのでしょうが、中國の詩史の上でも、このような詩を、かなり早くから見ることができるようです。その最も顕著なものとして、いまから約千二百年まえの、中唐の詩人李賀をあげることができようか、と思います。彼の詩に「筆補造化天無功」という句を含むものがありますが、天無功は端的に彼の詩の近代性を物語っています。彼の詩法はピカート氏の指摘する近代詩人の方法と、その方向において同じものだと、考えられます　ところで、李賀の詩の場合は、中国の社会では稀少なものであるため、宋のすぐれた批評家嚴羽によって「天地の間に自ら鈍きえざるもの」と評され、尊重されています。これは、危ならざるものが普遍的であるがゆえに、危なる詩が「批評」として存在しうる、と

いうことなのであり

壹の明るさのなかには悠々とつづく畑の晴褐色や幽暗な森の衣がある。壹のなかにとり囲まされた夜の緑線、壹への夜の分前、それらも壹に参加しておらねばならないのである。 P.22

壹の中の夜のようにそれは存在せねばならないものなのでしょう。

ゲーテの詩のなかでは詩的世界が先ず第一に存在する最初の言葉のなかにすでに詩的世界が完全に存在しているのである。この詩的世界は発生するのではない。水源的に存在しているのだ。これは存在力を有する詩である。この詩の本質をなしているのは発展ではない。すなわち一つのより高い世界への努力ではない。そうではなくて、存在なのである。詩が詩句のなかで存在を展開するのである。世界はすでに存在している。それは自己を顕現するだけなのだ。ここでは詩人は世界を創造する人間ではなくて、創造されたる世界がその人のまえに自己を開示するところの人間である。 P.24

李賀の詩が、下から上への詩とすれば、杜甫の詩は上から下への詩といえましょう。杜甫の詩は「詩史」と呼ばれていますが、彼の詩が史であるのは、彼が歴史的事件をひろいあつめて詩としたからではなく、歴史的存在としての世界が、杜甫の詩句のなかで自らを展開しているからなのです。杜甫の前で、「諸事物がその充溢から言葉を生み出」したのでした。

そのような詩はまた、詩人の「体験」から生れるのではない。逆に、そのような詩からは、さまざまな体験が発生するのである。 P.15

という指摘もまるで杜甫の詩を説き明すためにのべられているように感ぜられます。

しかし最も強力な連関と最も強力な孤立化との出会いに際して、この最大の対立の場所に産み出される子供　その子供は単に過去の諸世代の遺伝質から合成されたようなものではない。何故なら、性が人間を孤立化するあの瞬間に、人間と、彼がそこから生じ来ったもろもろの世代との連関は中断されるのだ。そしてそこに生じた裂け目をとおって、もろもろの世代の遺伝質とは全く異ったものが――すなわち完全に新しいものが――人間のなかへ入り込み得るからである。ここに新しい人間が発生する。――それはもろもろの世代から譲り渡されたものと、諸世代の裂け目に闖入した、完全に異質的なもの、驚異的なものとの一種の混合体なのである。人間の多様性は諸世代の裂け目へのこの驚異的なものの闖入に由来しているのである。

p.125

この文章の中の「子供」の代りに「詩」ということばをおいたならば、そのまま、詩の生れる消息が説き明されることになるように思われます。

西脇順三郎氏は「現代詩の定義」という文章（『斜塔の迷信』六八頁）の中で、「通常の経験の世界において、遠い関係に立つ二つのものを近く連結させ、また逆に近い関係に立つものを遠く分離させること」によって生れる「超絶的美感」が「詩の内容」だといっています。ただ、そのような結合、分離から、なぜ超絶的美感が生れるか、という点では、不明だ、とし、また、結合、分離さえなされれば必ず超絶的美感が生れるか、という点については、そうではなく、偶然の力にまつほかはない、他力だ、といっているのは面白いと思います。この他力は、ピカート氏のことばをつかえば、「神のはたらき」なのであろうと思われます。

「裂け目への驚異的なものの闖入」これこそ詩であり、このような「対立的なものからの創造は　人間のあえて為し得ることではない、このような飛躍をあえてするのは神だけである」P.124といわねばならないのでしょう。そして

地上において眼に見うるものとなった作品が、人間の方へというよりは寧ろあの永遠なる詩の方へ志向　P.233

し、また

真実の詩人は人間のためよりも寧ろ不可視的世界のなかにあるあの永遠の詩のために詩作する　P.233

のでありましょう。

7　かたりかけ

つたない感想が　思いがけなく、長くなってしまいました。それでも、この本から得た感銘のごく片はしを申しのべたにすぎません。「それ以上のものが蔵されている」書物については、そのすべてを語ることが、もともと不可能なのだといえましょう。

終りに、この書の文体に著しい一つの特徴について記し、筆をおきたい、と存じます。

翻訳されたものについて、文体を云々することは、ともすれば人の笑いを招くことかとも存じますが、翻訳というものは、一種の「結婚」であり、その中には、訳者がまことの詩人であれば、そこに　存在はみずからを正しく顕現するであろうこと、つまり、訳された文章に原文の文体が、

そのありのままの姿をあらわすであろうこと、そうして、あなたは訳者としてそのような詩人であられることが、わたくしには信ぜられますので、あえて、文体についての感想を書きつけることをはばからないのです。

この書物には「語りかけ」があって「論証」はありません、すべての語りかけがそうであるように、同じことばがいくたびかくりかえされます。だが、その同じことばが「きまり文句」のようには聞えません。

これこそ本書の著者が、リルケによっていみじくも評されたように「文筆家とは正反対の人で多分著述家でさえ」ない「苦悩する人」の見出した文体なのだと、思われます。

論証がないのは、この本が「発展」をめざしていないためであり、この書物のなかで存在が自らを展開しているからでありましょう。

論証されたものしかうけいれることのできない直線的な人には、あるいは物足りなく感ぜられるかし知れませんが、ふかく聴くことのできる繊細な耳をもった精神ならば、この本のうちに、澄明精謐な神の賀筆を読むことでありましょう。

（一九五七・七・一九―二一）

注　『ゆるぎなき結婚』の訳書は、一九五七年六月十五日、東京みすず書房が刊行した。

「春風馬堤曲の解釈」読後

原田憲雄

――筆者　小林大吉郎氏に――

大論「春風馬堤曲の解釈」（一九五六年十一月神戸大学発行『研究』所載）をお恵みいただき、まことにありがとうございました。早速、貪るように拝誦熟読いたしました。

蕪村のこの詩には　透明な艶情がかげろうのようにゆらめきますことを、かねてより不思議に思いつつ読み返してまいりましたが、その幽微な密義をかくまで瞭然と闡明せられました御解釈に、胸のすく思いがいたしました。

「人間の眞実は羞恥の屈折を受けて表現せられる」（二頁）ことは、芸術作品をうけとる場合、最初に顧慮せらるべきことでございましょうが、「世の注釈家先生には羞恥の存在すら目に入らぬらしい」ことは、小林敬君がつねづね浩歎いたしますことばの通りでございますゆえ、思い合わせて微笑し　「娘がそれを察して、堤の下へ草を摘みにいって晴着を引裂き服に怪我したのです」といってもし、足姿は固よりそれを信じないであろう。それをそのまま信ずるのは蕪村の評釈家のほかにはない」（九頁）には、再び笑いをとどめることができませんでした。中新君にもぜひ尊文を読ませたいものと存じます。

○やぶ入や浪花を出て長柄川

○春風や堤長うして家遠し

冒頭のこの両句について、「浪花」「長柄」「長うして」と、三たびかさなる加の悲いをふくんで広白い音調に、馬疲をひとり歩む少女の春愁がまず描かれ、そこになずさい、もつれてゆく、人生の暗翳に佇む蕪村の、はけくちのない鬱悒の低迷するさまを、その見えない姿に指摘されましたことは、『李詩止觀』の巻頭に「明静」の二字を揮毫した天台を空見するにひとしい痛快さでございます。

○堤下(ヒリテ)摘芳草　荊寺緑塞路　荊籬何無情　裂裙且傷股

この堤下の章の歌文は、的的として一挙に雷脳を抉取せられたものと存じます。その文意をたどってゆきますとき、芳草をつかもうとするおのれの手を荊棘と感ずる反者のやさしさと、その反者にもかかわらず、溺れていって芳草を裂き且つ傷つけずにはいられない、蕪村のくらい実存苦が、おのずから、わがものように、迫ってまいります。もしも、次の章

○渓流石點々　踏石撮香芹　多謝水上石　教儂不沾裾

の、多謝水上石がなければ、苦しみは救いようのない闇黒におちいり、蕪村は直ちに滅亡したことおもわれます。芳草のやさしい愛容が、芳草みずからを生命に開花させ、且つ、荊棘を香芹にかえる、この不思議さには感歎のほかはありません。これも多分、詩人の反者のやさしさが、影を投じたものでしょうが、いかにやさしいこころづくしも、それをうけとめる若い無垢な女身がなければ、この奇蹟は生れなかったのでございましょうか。ここには俳句芸術の玄義がおのずから接受するさまも、感ぜられます。

渓流の章の四句に三つまで石の字をちりばめたことは、音韻的にも視覚的にも、いかにも軽快

で、制禁の門をくぐったのち、にわかに溢れ上る生命の歓喜におどる少女の身ぶりか、掌文にそのままに躍動しているようでございます。後の

○呼雛雛外雛　籠外草漸地　雛鳥欲越籠　籠高題三四

にし、四顆の癖字を用い、その一は中ごろに、一は低く、餘すニつを高くならべて掲げたことも、また、三石の矣緩淡と相まって、愛の運動の錯落参差たるさまを暗示し、無限の趣を覚えさせます。

中唐の詩人李賀の「惱公」と題する詩は、全篇が浮流章と同風光のものかと推しておりますが、無生五輪下　人在石蓮中　なる句があって、石字にこめる詩人の思いに、彼此相通うものあるを感じました。

「やぶ入り」「春風」を序分とすれば、堤下・浜流の両章は正宗、以後は流通にも当りましょうが、流通の長大なるに比して、正宗のこの短かさは　かえって事件の重大さを物語るものでございましょうか。また、流通においても、もっとも緊凶な場面が漢詩形式をとっていますことのうちに「屈折した羞恥」が、いかにおのれを押いかくそうとするかを示すもののようで、興味ふかく存じます。

その他、柳老・無慈、三婚・蘇揚、莖短泡乳、慈母懐抱等についての前説は、いずれも興目の御解釈と存じます。

「馬場曲」の後に「源河歌」をよみ、老婆呪の「あなうぐひすよ」に到りますと、よろこびを知った後、知る前に増すうれいのつもって、堪えがたい憂悶が荒村の晩年を覆ったか、と想像されます。それが具体的にいかなるものであったかを、御續稿によってお示し下さいますよう、鶴首いたします。

（一九五七・九・一一）

幽眠

中夏歴代詩選試之七

原田憲雄

池のほとりにて

日の暝るれば　幽けき眠り　涼ろに
流るる雲は　巌のくまに　漂ぎりぬ
こひしき思ひ　はるかなる風に　寄す
きみが窗のへの竹むらを　ゆすれかし
池のほとりを　ひとりのみさまよへば　薄ぎぬのころも冷え
ふとよみがへる　書を読みつつ　ふたりして　茶をすすりし日
露を受くれば　衰えしはちすも　その葉の香りをはなち
谿にのぞめば　独つ鳥も　羽のかたちのつくろはろを……

野にて歌へる

晴　王采薇

日暝幽眠涼
流雲漂巌曲
相思寄長風
動汝窗外竹
池頭孤行薄羅冷
卻憶把書雙樹若
受露衰荷散葉香
臨谿獨鳥矜毛影

（池上書寄薇隱）

唐　李賀

烏の羽の矢をつがへ　山桑の弓ひきしぼり
天を仰いで射落すや　蘆ふくむ鴻の鳥
麻ごろも　あか染みたれど　北風にむかひたち
酒あふり　日くれ　田中に歌うたふ
男の子はや　身はくぐむとも　心だにあにさはまらむ
柳ゆらと衰ふるとのさだなきに　天を嘯れど……
さはされど　つめたき風も　春されば　柳のみどり
枝えだに　看よ　むらむらとかすみわたるを

亞翎羽箭山桑弓
卯天射落銜蘆鴻
麻衣黑肥銜北風
帶酒日暁歌田中
男兒風寒心不寒
指柳不等嗔天公
東風又裝為春柳
條條看即煙濛濛

（吁歌）

馬の詩

連錢の菁毛の龍馬
銀の蹄　白く霧ふむ
錦のあふり　織るさへなきに
金の轡　たれぞ鑄むとや

龍青貼連錢
銀蹄白踏煙
無人織錦韉
誰為鑄金轡

（馬詩）

おもひぐさ

唐　王維

なんごくの　おもひぐさ
はるされば　ひらくいくえだ
はなあまたきみよつみてよ
これやこの　おもひぐさ

紅豆生南國
秋來發幾枝
勸君多採擷
此物最相思
（相思）

團扇のうた

七寶を彫りたる團扇
きらきらと照らふ月かも
君とぬてあふげば涼し
あひ憶ひて忘るるなかれ

七寶畫團扇
粲爛明月光
與郎卻暄暑
相憶莫相忘

桃葉

青青なる竹村の竹
白じろし團扇つくらむ
君の御手にさやにゆらぎて
吾に寄せね風のたよりを

青青林中竹
可作白團扇
動搖郎玉手
因風託方便

園前　園前
そをもちておもてをかざす
やせほそりけばひもせねば
君を見むことの羞しも

はなぞのに

はなぞのに　うるはしく　ひかげかたむき
蘭かほる　まどのべに　さやかぜわたる
ゆふされば　ふたたびを　けはひあらたに
すだれかかげ　ささらさの　木々にむかひぬ
蓁ごもりに　うぐひすのこゑは　ひびかひ
めをの蝶　はなばなのあひに　ひらめく
つれづれをなぐさむと　悪かい鳴せど
むなぬちのうれひ　みだれ　しらべをなさず
きみますは　はるかなるあなた　ならねど

匿前復園前
自許自障面
憔悴無復理
遙與郎相見

（蓁三園前歌三首）

劉　令嗣

花庭麗景斜
蘭牖輕風度
落日更新妝
開簾對春樹
鳴鶯蓁中響
戲蝶花間飛
調悲水晏懷
心愁不成趣
良會誠非遠

このゆふべ　せんなしや　とひきまさねば
かすかなるこのおもひ　つげむとすれど
こもりすむみに　かなし　はろはくれゆく

周家の墓の柏のもとに並んで

朝から　からりと晴れて
すがすがしい風よ　鳴く蟬よ
柏の木のもとにねむる人のためにも
われわれは　楽しみあはねばならぬといふもの
澄んだ空氣を顫はせて　新しい歌をうたふ人
緑の酒に　頬べをぽっと赧らめるひと
明日のことは　明日にまかせておくがいい
かうして　わたしはたのしいのだ　何もかも忘れてしまって……

河陽縣にて　（改稿）

佳期今不還
欲知幽怨多
春閨深且暮
（春閨怨）

陶　淵明

今日天氣佳
清吹與鳴蟬
感彼柏下人
安得不為懽
清歌散新聲
緑酒開芳顏
未知明日事
余襟良以殫
（詩人共遊周家墓柏下）

浩　岳

ひくき身は　羽よりかろく
年はたち　召しをかうむる
忌みありて　しりぞきしかど
ふたたびを　みかどに　のぼり
右大臣のしりへに　つき
大君のつかさに　ゐしか
うそぶきて　山べに　かへり
鍬とりて　苔くさぎろに
深谷に　くずの葉　しげり
籬には　つづる　花の木
はなびらは　林べに　おち
高き岳　岡に　分づれ
たかきゝ　ひくき　つねかもあらむ
おのゝ　のぼる　ときのまぎれぞ
大御代の　やすらにあれど

微身輕蟬翼
弱冠忝嘉招
在家妨賢路
再升上宰朝
猥荷公卿擧
虛陪衆王寮
長宿歸京山
擇未得時苔
幽谷茂纖葛
峻嶺敷榮條
榮華隱林趾
飛蓬秀陵高
早高亦有常
升降在一朝
伏恨良時未
[illegible]

わが道の　あはれ　とざせる
たとふれば　野べのよもぎの
風のまに　ひろがへるかも
すぎしひは　みやこにうみき
河のべに　いまや　むらをさ
城にのぼり　かへりみすれば
南風はるか　とばりをあげぬ
うねり波　なにそたゆたふ
やまなみの　うたたに　たかき
たれかいふ　みやことほし　と
ちかけれど　身のさかろのみ
たれかいふ　むらをさいやし　と
わづらひは　よき名なきのみ
あめつちのなかからに　うまれ
しもとせを　えやはまつべき
すむやけき　石うつ火　なし
ほのかなる　道わたる風
青都に　のこる名の　なく

小人道遂消
曾如野田蓬
齡流隨風飄
昔倦都邑游
今掌河朔徭
登城眷南顧
凱風揚微絃
洪流何浩蕩
修芒靜岱嵓
誰謂吾京遠
言適身實遵
誰謂邑宰輕
令名更不劭
人生天地間
百年孰能要
欲如鼓石火
曾若過道飈
青都無遺聲

桐郷に　ほまれぞ　なごる
さきはひは　つつしみにあり
わざはひは　おごるにぞよる
つかさたるざえは　なし　とも
民をみる　うとからざらむ

李夫人のうた

お前ではないのか
立って
見ようとすると
ゆらゆらとして……
どうして
ためらって
ここに　來ようとは　しないのか

桐郷有餘謠
福謙在純約
害盈由矜驕
雖無君人德
視民亦不憍

漢劉徹

是耶非耶
立而望之
偏何
姍姍
其來遲

（李夫人歌）

二人の青年は舟に乗った

……それから　二人の青年は　舟に乗った
矢のやうに　去っていった　あのすがた
いつも　わたしは　あなたがたのことを思って
胸が　いたくなる

二人は　舟に乘って
ずんずん　遠ざかって行ったきり……
いつも　わたしは　あなたがたのことを思うのだ
避けえた禍いに　どうして向ってゆかれたのか　と

あが夫　雄々し

わが夫　雄々し
邦の　益良夫
夫　矛とりて
君のさきがけ

二子乘舟
汎汎其景
願言思子
中心養養

二子乘舟
汎汎其逝
願言思子
不瑕有害

伯今朅今
邦之桀今
伯也執殳
為王前驅

用
無名氏

夫　征きしより
われは　やつれぬ
紅　おしろい　も
たがためにせむ

雨のふる日も
空はるる日も
夫のうへのみ
おもひ　あぐみぬ

野の　忘れ草
庭に植ゑむか
夫おもふだに
あかこころ　悴す

みさご

自伯之東
首如飛蓬
豈無膏沐
誰適為容

其雨其雨
杲杲出日
願言思伯
甘心首疾

焉得諼草
言樹之背
願言思伯
使我心痗

くゎんくゎんと　なきかはす　めをのみさごよ
せせらぎに　せせらぎに　こゑひびきあふ
あてやかに　ひそやかに　ゐませるきみは
あはれわがつま　まことわがつま

關關雎鳩
在河之洲
窈窕淑女
君子好逑

みづぎはに　いりみだれ　おふるあさざよ
そをつむと　みづぎはに　きみうるはしき
あてやかに　ひそやかに　ゐませるきみは
まなぶたにすむ　わがまなぶたに

參差荇菜
左右流之
窈窕淑女
寤寐求之

きみゆゑに　きみゆゑに　よもまどろまず
おもへども　おもへども　きみゐまさねば
もどかしき　もどかしき　もどかしき
いねかへりしは　はたいくそたび

求之不得
寤寐思服
悠哉悠哉
輾轉反側

いりみだれ　さきさかり　おふるあさざよ
そをつむと　たたずめる　きみうるはしき
あてやかに　ひそやかに　ゐませるきみよ

參差荇菜
左右采之
窈窕淑女

きたりてわれと　ことかなでむよ

みづぎはに　いりみだれ　おふるあさぎよ
そをつむと　おりたてる　きみうるはしき
あてやかに　ひそやかに　ゐませるきみよ
きたりてわれと　つづみうたばや

附　記

玉采薇と湍岳との作品をのぞいて、他はすべて、戦前、わたくしがまだ学生であったころの訳である。闕雎のごときは、訳というより、原詩に触発せられた創作という方がよいかもしれない。いずれも拙ないものながら、今更あらためてもしかたがないので、もとのまま録した。

琴瑟友之
參差荇菜
左右芼之
窈窕淑女
鐘鼓樂之

敬

袁中郎私記　三

原田憲雄

一

袁宏道中郎は、明の神十二代皇帝穆宗の隆慶二年戊辰(一五六八)の十二月六日、湖北省の南端、河夜湖の北方のまち公安県の長安里に、誕生の袁七沢の次男として、生れた。母は龔氏である。

中郎の生れるとき、祖母の余氏は、月がふところに入る夢をみた。それで、中郎の幼時の呼び名を「月」といった。

出生に神秘な伝説を加えることは、珍らしいことではない。だが袁氏の家にその傾向が強かったのか、あるいは祖母の余氏に憑依性があったのか、中郎の兄宗道伯修の出生時にも、相似た傳説が残っている。中郎の弟中道小修が、伯修のために撰んだ「石浦先生伝」には次のようにいう。

初め、先生降生の夜、祖母、夢に一つの美たき人の頭、天より飛び来る。今に画くところの天人菩薩の飾りの宝絡、交り垂るるがごとし。襟をもてこれを承くるに、はじめてめざむ。しかして先生うまる。実に嘉靖庚申二月十六日なり。

こうした神秘的傾向は、やがて中郎兄弟にもあらわれるが、それについては後にのべる。

嘉靖癸申は三十九年五月で、父の七沢は数え年十七歳である。まえのとしの三十八年に七沢の父の左溪が死んだ。七沢の結婚はそれに先立つのであろうが、龔氏の父方伯と七沢とが相知ったのも　さほどさかのぼらぬようであるから、七沢と龔氏との結婚はその年の春のことでもあろうか。龔氏の生年はつまびらかではないが、七沢と同年か、二三歳前後するくらいであったろう。

伯修と中郎との間に女子がある。後に毛太初に嫁したひとで、中郎よりは二三歳長ずるのみであった。[5]

中郎が生れたとし、父七沢は二十六歳、兄伯修は九歳で、祖母の余氏五十四歳、叔父の士玉ヤ氏は二十五歳だった。

中郎が生れたとし、日本では正親町天皇永禄十一年で、十一月には足利十五代義昭が将軍に任ぜられ、十二月には武田信玄が駿河に攻め入っている。ヨーロッパではネーデルランドの自由戦争が起った年である。

明の朝廷では、若い皇帝穆宗が立って、世宗治世の積年の弊政をあらためつつあった。すなわち、元年には、朝廷と道教との関係をたち切り、山東・河南の被災民を招撫して五年間の免税を行い、二年には、天下の田租の半ばを免じ、嘉靖四十三年以前の未納税は棚上げにした。この年異民族のアルタンが十万の兵をひきいて宣府を襲ったが、明軍はこれを反撃し、敵の本拠をついた。

穆宗は英明な天子だったが在位わずか六年で崩じた。皇太子朱翊鈞が位についた。神宗である。

穆宗は崩御の前日　閣臣の高拱　張居正・馮保を召し、乾清宮で、顧命すなわち彼らに対する遺言を　与えた。

「朕は統を嗣ぎてまさに六年ならんとするに、いま疾いたはしく、ほとんど起たざらんとす。先帝の付託に負えるあるも、家国は幼冲なれば、もって卿らに属ぬ。よろしく協輔して祖制を遵守すべし、則ち社稷の功なり。」

高拱らは　泣いて、拝して、退出した。

顧命の前では共に決をたれたこの閣臣たちも、その胸中にはさまざまの思いを秘めていた。高拱は張居正を追い出さればと考え、張居正は高拱を追放してやろうと思っていたのである。

穆宗が崩ずると、張居正は宦官の馮保と組んで、太后に高拱の専権を暴露した。こうして高拱は退けられ　張居正が宰相の位置についた。

翌年万暦と改元した。その元年は西暦一五七三年である。

宰相としての張居正は、極めて有能であり、革新的であった。『帝鑑図説』を撰んで少年皇帝の教育に心を注ぎ、考課法を復活して国政を記録し、官職を大整理した。これらのことは、いずれもすぐれた業績であったが、その進め方が、あまりにも急激であるため、十年ののち、居正が死ぬと、彼の家は剣づけされ　彼によって登用された官吏はその職を追われ、その政策は廃されていった。

神宗皇帝は優柔不断で　その上ぜいたくな性質であった。その優柔不断は、皇太子冊立をおく

らせて、朝廷に皇長子派と皇三子派との派閥闘争を生み、そのぜいたくな性質は、人民に対する重税となってのしかかっていった。朝廷の党争は、野にも反映しないわけにはゆかない、重税には胥吏の使嗾がつきものである、窮した民は流賊となって各地に蜂起した。更に海外からは八幡船の攻撃がたえない。哀中郎の育ち、生きた、高唐という時代は、こうした時代だった。

万暦元年に、中郎の生母龔氏が死んだ。伯修十四歳、中郎六歳、そうして、隆慶四年に生れた弟の小修は四歳である。

中郎は母の霊前で一哭して病絶した。人々は、そのかしこさに驚きもし、あわれみもした。

男の子たちはもとより家で育てられるが、中郎の姉は、女の子だからというので、母の実家で養われることになった。

ある日、中郎と小修とが室で勉強していると、突然門前から叔父の喜惜長が馬にのり、姉の袁氏を抱いて、孫岡の方からやってくるのが見えた。風がふいて、袖がひらひらと靡える。家の前までくると　叔父は二人によびかけた、姉は、馬上で、涙ぐんで二人にいった。

「わたしは、叔父さんのおうちにゆくけど、あんたたち、よくべんきようなさいね。」

二人の目にも、涙がいっぱいもりあがってきた。どうにか声を放って泣かなかったのは、そばに先生が見ていたからである。叔父と姉とが行ってしまうと、中郎は筆をつれて走り、後山の松林から遠ざかる姿を見送る。人も馬も孫岡のむこうに消えると、二人はとぼとぼと、家に帰った。

兄伯修は、結婚すると、妻の曹氏と共に、公安県のまちに新居をかまえ進士試験の準備をする。

同時に、葬氏の家で養われていた姉の袁氏、それに中郎・小修が、そこに同居し、亦祖母の魯氏がその世話をみることになった。

冬の寒い夜には、魯氏が柴をくべた炉に、一家がつどう。伯修もこのときには勉強をやめて輩に加わり、昔いまの話をするのである。袁氏は、話をきくのが大すきだった、ただもう話の終るのがつらいというふうに、茶を汲んではしきりに伯修にサービスするのだった。伯修は怪談がすきで　話に尾鰭をつけてこわがらす。袁氏と中道とは心ぼそくなってくる。ともし火がゆらゆらとゆれ、明るくなったかと思うと、急に消えそうになる。さあーっと、風が障子に吹きつける。物の怪がやって来たようで「キャッ」と叫んで、泣きながら走り出すと、伯修は手をうって、大わらいするのだった。

四人のきょうだいは、そろって聡慧だったが、袁氏はことにそうだった。女だから、他の三人のように塾師につくことはなかったけれど、耐き覚え、見習いで、経史百家から小説戯曲にいたるまで諳んじていた。あるとき、めくらの語歌師を呼んで、みんなで聞いたことがあった。そのあとで、袁氏は、ただ一度聞いただけの歌物語を、そっくりそのままくりかえした。つつましい性質だから、他家のひとには、おくびにもそんなところは見せなかったが。父の七沢は「この子が男だったらなあ」と、感歎するのがつねだった。

萬曆七年に兄の伯修が郷試に合格した。これが、中郎の勉学心をあふり立てた。八年に叔父の惟長が進士に登第した。中郎の心はいよいよふるいたった。

十年か十一年のころ、中部は、郷校の生徒で、年は十五六にすぎなかったが、城南に、文社、いまのことばでいえば文学サークル、を結成し、自らその長となった。公安派が誕生したのである。同人は、彼の兄弟、従兄弟、友人たち。大抵は中部より年長で、中には三十歳をこえるものもあった。三十歳以下のものは、少年の中部を師とし、その指導にそむくものはなかったという。[19]

兄伯修は、この前後に文集を出し、文人としてややその名を知られるようになっていた。公安の近傍でひらかれる文学者の会合に招待されることが少くない。彼は、こうした会合が好きだったから、衣を日につぐありさまだった。恐らく、そうした疲れからであったろう。名も知れない病気になって、ほとんど死ぬばかりであった。たまたま、一人の道士から、数息静坐の法を教えられ、まもなく癒った。

こうしたことがあってから、伯修は、ふっつりと文学運動から遠ざかった。当時「冲斉の法」というのが大いに流行した。雑念を去って心を空しくしているとやがて空をも飛ぶことができるようになる、という一種の仙人修行の術である。伯修はこれを信じて、公安県城内の家をたたみ、長安里に帰って、門を閉じ、変に薬草を栽培し、受験勉強もやめてしまった。[20]

万暦十一年、父の七沢は、進まぬ伯修に強いて進士の試験を受けさせた。

出かけはしたものの、伯修は、どうしても都に行く気になれない。黄河を見ると、やもたてもたまらなくなって、ひっかえした。その日は荆門まで来て、旅館にとまった。夜半に夢を見た。

神々しい人が「はやく、起きるがよい」こんなことが三度くりかえされた。伯修はめざめたが、また寝込む。神々しいその人が、またいう。「おまえは、どうして起きないのか。わしは、おまえのために、わざわざやって来たのだ。どうして、そんなに、ききわけがないのかな」。それから、杖で、伯修の足をそっとつついた。足がおきすぎと痛み出す。ふとんを押しやり、大声で叫んでとび出した。家をでるやいなや、さきのベッドがこなごなに崩れていた。

こんなことがあって、伯修の考えにも動機が来た。

家に帰って、しばらくして、妻の曾氏が死んだ。伯修には再婚の意志はなかったが、父七沢のたっての勧めで、農家のむすめ李氏をめとった。農家のむすめをもらったのは　生活のためにあくせくすることはできない性分だから、妻の実家が農家なら、自分にどうこういうことがあっても、家族だけは食いぶちがあるまい、と考えたからである。

伯修は、さらに、父のすすめで、進士試験の準備をはじめるのであった。[12]

二

伯修の再婚した次の年の嘉暦十三年、中郎は李氏をめとった。[11] 中郎が、その最初の詩集『服饉集』の巻頭におさめる、「育馬場」「採桑度」「古剣篇」などを作ったのは、この年、十八歳のときのことであろう。

青驪馬
九尺強
百金買
千金裝
雙蹄不着地
影滅如乘翔
借問冶遊郎
何為在他鄉
下馬立青梧
手提碧珊瑚
千喚不知人
豈眼眄當壚
當壚豈不冶
裊衣悠曉露
五步一倚驪
十步一回顧
客從遠道來
贈我青鸞帶

青驪馬
九尺強
百金にて買い
千金もて装う
雙蹄は地に着かず
影 滅えて 乘翔するごとし
借問す 冶遊郎
何すれぞ 他郷に在る
馬より下りて 青梧に立ち
手に提さげぬ 碧珊瑚
千たび喚べども 人を知らず
眼を豈して 壚に当るを眄る
壚に当る 豈に冶やかならざらん
衣を裊げて 暁の露を愁う
五歩に 一たび 駿を停め
十歩に 一たび 回り顧る
客の 遠道より来りて
我に贈る 青鸞の帯

交頸復同心
白石青松在
東家好女秦羅敷
西家蕩兒馮子都
鴛鴦只愛毛翎好
那知水底有鵜鶘

頸を交え　復た　心を同じうし
白き石と　青き松と　在り
東の家の　好女は　秦羅敷
西の家の　蕩兒は　馮子都
鴛鴦　只だ愛す　毛翎の好きを
那んぞ知らん　水底に　鵜鶘のあるを

（青青馬）

年年三月飛桃花
楚王宮裏闘繁華
雲連蜀道三千里
柳拂江堤十萬家
丹樓綺幌繁飛燕
青閣文牕起睡鴉
鴉歸燕語等閑変
不試江城春早暮
東風奮吐合歓花
落日烏啼相思樹
王孫挾彈郢門西

年年　三月　桃の花を飛らし
楚王の宮の裏に　繁華を闘わしむ
雲は連る　蜀への道の三千里に
柳は拂う　江の堤の十万家を
丹ぬりの樓の　綺せる幌に　飛燕は繁くい
青くかざりし閣の　文ある牕に　睡鴉は起ちぬ
鴉は歸りて　燕の語り　閑かに変り
試えず　江のほとりの城に　春早く暮るるを
東の風に　香りを吐つ　合歓花
落つる日に　烏は啼けり　相思樹
王孫は彈を挾む　郢門の西

少年館客章臺路
少年嬌嬌名都兒
雕鞍朱勒黄金露
採桑陌上青絲籠
紅粉樓中白紵辭
白紵綠水爲君起
青水環珮如流水
東城絲管接西城
相府豪華厥朱邸
俠客飛鶯古道傍
佳人賣笑垂楊裏
垂楊二月隱朱樓
家家喜樂上頭
綦錦喧闐朝送酒
管絃嘈雜夜銭鈎
繁絃急管夜初闌
惜花少女怨春殘
桃花凝凝歌成血

少年は宮に借る　章臺の路
少年は　嬌嬌たり　名都の兒
雕めし鞍　朱の勒　黄金の露
採桑陌上の　青絲の籠
紅粉樓中の　白紵の辭
白紵　綠水　君がために起り
青水　環珮　流水のごとし
東城の絲管は　西城に接し
相府の豪華は　朱邸を厥す
俠客は　鶯を飛す　古道の傍
佳人は　笑を売る　垂楊の裏
垂楊　二月　朱樓を隱し
家家に喜樂す　樓上の頭
綦錦　喧闐　朝に酒を送り
管絃　嘈雜　夜　鈎を銭す
繁絃　急管　夜　初めて闌け
花を惜みて　少女の　春の殘れるを怨む
桃花　凝凝　歌は血と成り

蘭燼漫漫火送来
曉風楊柳菖蒲浦
秋月梧桐金井闌
秋月春花無斷絶
門前都李九廻折
願作陽臺雨後雲
誰憐洛水風中雲
陽臺洛水夢空長
那似倚家戒指林
還得東家佳姉妹
却延西第好兄郎
織成錦帝迷胡蝶
種得青梧鳳凰
遊人悠悠無窮已
踏遍江城春萬里
只解賣秋無似雲
那惜年光去如矢
花開花落迫生愁

蘭燼　漫漫　火は宗さを送る
曉風　楊柳　菖蒲の浦
秋月　梧桐　金井の闌
秋月　春花　斷絶すること無きに
門前の都李　九廻折す
願わくは　陽臺雨後の雲とならん
誰か憐れむ　洛水風中の雲
陽臺と洛水とは　夢と空との如く長きに
那んぞ　倚家の戒指の林に似ん
還び得たり　東家の佳き姉妹
却って延く　西第の好き兄郎
錦の帝を織り成して　蝴蝶を迷わせ
青梧を種え得て　鳳凰を棲ましむ
遊人は悠悠として　窮已ることなく
踏遍す　江城　春萬里
只だ解す　賣秋　無いて雲に似たるを
那んぞ惜しまん　年光の去ること　矢の如きを
花開き　花落ちて　迫かに愁いを生じ

郢樹鄧雲幾度秋
霍氏功名成夢寐
梁王臺館空山丘
荊指綢復竟何言
昨宵弱水今崢嶸
無人更哭西州路
有雀還登習氏門
漢恩何淺天何薄
百年冠帶坐蕭索
昔時噓氣成煙雲
今朝失勢李泥磔
青蛾皓齒嫁何人
金牀玉几爲誰作
已矣哉
歸去來
楚國非無寶荊山
空有哀吾首白雲
陽春調千載

郢樹　鄧雲　幾度か秋なる
霍氏の功名は　夢寐と成り
梁王の臺館は　山丘に空し
荊指の綢復　竟に　何とか言わん
昨宵の弱水は　今　崢嶸となりぬ
人の更に西州の路に哭する無く
雀のみ有りて　還た　習氏の門に登る
漢恩　何ぞ淺く　天　何ぞ薄き
百年の冠帶　坐ろに蕭索
昔時の噓氣は　煙雲を成し
今朝　勢を失って　泥磔に墜てらる
青蛾　皓齒　何人にか嫁ぐ
金牀　玉几　誰が為にか作らん
已んぬるかな
歸りなん　いざ
楚國に　荊山の無きにあらず
空しく　君を哀れんで白雲を看る　あらん
陽春　千載を調じ

還推作賦才　　還(また)た作賦の才を推さん

うきうきと、調子にのって、一氣にうたいあげたような詩である。もとより、これだけの詩をつくるには、苦労して推敲をかさねたに違いない。けれども、その迹は見せない。それほどに、当時の中郎の心のはずみが、詩の調子の中に、流れこんでしまったのであろう。

三

萬曆十三年の初夏四月に、中郎は、妙法の叔父の導惟学・惟長と共に、二聖禅寺に遊び、同寺所蔵の経典書冊を検している。「初夏同惟学惟長弟導遊二聖禅林檢藏有述」四首がある。

一尊高閣許從容　　一尊　高閣　從容を許し
眺盡南湖與北峰　　眺盡す　南湖と　北峰と
青葉黄衣餘碼在　　青葉　黄衣　餘碼　在りて
玉函珠匣總塵封　　玉函も珠匣も　總て　塵に封ぜらる
空江隱隱流清梵　　空江　隱隱として　清梵流れ
別壑沉沉起暮鐘　　別壑　沉沉として　暮鐘起る

昏黒談経人不去
知君学佛意初濃

丈六空傳艸一莖
蓮臺肅肅古先生
夜深虚閣聽龍語
世遠枯松讀佛名
蒲橋参來知行淺
稻畦(12)裁就覺身輕
等閑法法都如夢
眼底何勞覓化城

禪関避客晝常扃
竹樹陰森可一庭
野雀半啣天女粉
梁塵漸汚佛頭青
六時僧礼蓮花徧
三教人翻貝葉經

昏黒なるに　経を談じて　人去らず
知る　君が学仏の意の初めて濃やかなるを

丈六　空しく伝う　艸　一莖
蓮台　肅肅たり　古先生
夜深うして　虚閣に龍語を聽き
世遠くして　枯松に佛名を讀う
蒲橋に参じ來って　行の淺きを知り
稻畦を裁ち就して　身の軽きを覚ゆ
等閑の法法　都て　夢のごとし
眼底に　何ぞ労せん　化城を覓むるを

禪関　客を避けて　晝は常に扃し
竹樹　陰森として　一庭　可なり
野雀　半ば啣む　天女の粉
梁塵　漸く汚す　佛頭の青きを
六時　僧は礼す　蓮花徧
三教　人は翻す　貝葉経

衣下有珠君識否　衣下に珠あり　君識るや否や
瞻来如欲暗明星　瞻め来れば　明星を暗んと欲するがごとし

蒼枝嬌嬌欲盤空　蒼枝　嬌嬌として　空に盤(わだか)まらんと欲す
高閣冷冷受遠風　高閣　冷冷として　遠き風を受く
怪石枯藤隨意古　怪石　古藤　隨意に古り
砌花睡艸自然工　砌花　睡艸　自然に工(たくみ)なり
六朝道事殘鐘外　六朝の道事　殘鐘の外
千佛生涯曉鏑中　千仏の生涯　曉鏑の中
我亦冥心求聖果　我もまた　冥心に　聖果を求むるに
十年夢落虎溪東　十年　夢は落つ　虎溪の東

詩中の「化城」「衣下有珠」はいずれも『法華経』に見える譬喩である。『法華経』は、大乗経典中の肝要であり、禅林では好んで諷誦するから、二聖寺で、中部がまずこの経を図したのは、自然である。『法華経』は、こちたい理論をつみかさねた経ではなく、譬喩・説話に満ちた、極めてドラマティックな経典で、その文章も香り高いものだから、中部がこれにひかれたろうことも当然である。

それはさておき、「知君学仏意初源」の句は、注意すべきであるように思われる。ことば通り

にとれば、惟学・惟長に学仏の意が動き初めたということになるのであろうが、むしろ、中郎に動き初めた学仏の意が、惟学・惟長の動向に投影されたもの、と見てよいであろう。

中郎が二聖寺に遊んだのは、もとより、これがはじめてだったのではない。彼の撰した「公安二聖寺重修天王殿疏」[14]によれば、こどものころ、たまたまこの寺に遊んで、滑川居士なる人の撰んだ碑文を読んで、寺の由緒の古く尊いことを知り、駆けて兄に告げた、といっている。

幼童が寺碑を読み且つ解したことは、その早慧を語って面白いが、袁氏の教えとは、必ずしもかかわりはない。叔父たちと訪ねたこの日には、ただちに至蔵に入って、法華等の大乗至典を読み、ある程度までこれらを把握したのである。「我亦冥心求聖乗」は詩文の上での虚構というわけではなかったであろう。

彼の思想上の彷徨遍歴は、この前後から始まる。兄の伯修のそれが、不老長生の術のような迷信から始まるのにくらべると、中郎のは、ただちに堂奥にせまる勢いを見せる。そうして「十年夢落虎溪東」には、いしくも、彼が晩年にたどりつく信仰上の帰結を、暗指するかに見える。

四

万暦十四年丙戌（一五八六）、兄の伯修は進士の試験に第一番で登第した。[15] 袁氏の家より初めて進士を出したのである。進士を一人出せば、その家は、公安のような土地では、名家とよばれてよい。

まして、その第一番となれば、家名は天下に聞えるのである。袁氏一家は、忽ち春に逢う思いで、甚だ晴がましいことであったろう。

中郎は、前の年、郷試をうけて不合格であった。兄がこの栄誉をかち得たからには、中郎たるもの、じっとしているわけにはゆかない。そうこうするうちに妻の李氏は、男子を生んだ。長男の誕年迎えである。中郎は数え年十九歳で父親となったわけである。後から、追いかけられるような気持で「拳子の業」にはげむ。だが、彼の心は、ときどき、ふっと空しい思いにとらわれることがある。試験をうけ　それに合格し、官吏になって、さてそれがどうだというのか。そういう疑いが、かげるのである。おのれの子を見ていても、おのれが父親になったという気持が、痛切ではない。無心な赤ん坊の顔をながめていると　確かに可愛いのだが、この子がやがてまた青年となり、今のおのれと同じように受験勉強にあくせくしなければならないのか、と思うと、ふびんになってくる。そんな風にして、次から次へと、同じことをくりかえして、人間は一体なにをしようというのか……

そうした疑いは、しかし、いつまでも中郎を占めていることはできない。家にいても　外に出ても、死の話が出、そして、きき、たように「今度は、あなたですね」と結ばれる。なにげなく人のいうそのことばが、中郎には、やわらかいけれども、鋼以上にこたえる鞭だった。恐らく、そうしたあせりと、過労とからであろう、遂に発病して、三ヵ月余を病床に送ることとなった。

呼嗟我生年十九　　呼嗟（ああ）　我れ　生れて　年十九

頭髪未長顧已朽
病窓三月苦沉吟
面貌如烟軟露肘
羸枯博得妻兒憐
七尺浪為鬼神有
筐裡殘書別故人
几上龍鍾開老眼
無情莫問囊中錢
有秋堅克林下酒
蟲臂鼠肝彼何人
嗟來子孫真吾友

頭髪未だ長せざるに　顧すでに朽ちぬ
窓を病みて　三月　苦しみて沈吟し
面貌　烟のごとく　露わなる肘を軟げぬ
羸枯　博え得たり　妻兒の憐れみ
七尺　浪りに　鬼神の有となる
筐裡の殘書に　故人を別ち
几上に　龍鍾として　老眼に開わる
情無くも問うことなかれ　嚢中の錢
秋ありて　堅た克つ　林下の酒
蟲臂・鼠肝　彼れ何人ぞ
あわれ　子孫こそ　真の吾が友

（病中短歌）

荒草緑如烟
何秋不可憐
病家無客至
小犬亦高眠
開帙尋詩料
添衣欲酒錢

荒草　緑なること　烟のごとく
何れの秋か　憐れむべからざらん
病家には　客の至ることなく
小犬も　亦た　高眠す
帙を開いて　詩料を尋ね
衣を添えて　酒錢に欲く

閉門讀莊子
秋水馬蹄篇

對客心如怯
嚬銅只自憐
負暄疏敗髮
發笥理殘篇
名豈儒冠悞
病因濁酒痊
浮生喻泡影
何以樂青年

獨坐眞成悶
孤砧急暮聲
乾坤偏逐道
世路幾狂生
騷雅原無命
湖山賸有情

門を閉して　莊子を読む
秋水・馬蹄の篇

客に対えば　心怯ゆるがごとく
銅を嚬いて　只だ　自ら憐れむ
暄かきに背いて　敗髮を疏り
笥を發いて　殘篇を理む
名は　豈に　儒冠を悞まん
病は　濁酒に因って　痊ゆ
浮生は　喩えば　泡影
何を以てか　青年を楽しまん

（病起獨坐）

獨坐　眞に　悶を成し
孤砧　暮声　急なり
乾坤は　偏えに　道に　逐して
世路は　幾人ど　狂生なり
騷雅　原と　命無く
湖山　賸して　情あり

一丘何不可
身外即浮萍

強欲親曒日
無那怯曉風
纏綿悲二壁
坐起伏雙童
世路他如夢
浮名我失弓
一番三徑裏
秋菊又成空

不斷青雲夢
黙堪白髮情
跳梁山鬼妒
落莫酒人輕
色界身終苦
無生学未成

一丘　何ぞ　可ならざらん
身外　即ち　浮萍

強いて　曒日に親しまんと欲するに
那んともするなし　曉風に怯ゆるに
纏綿　二壁を悲しみ
坐起　雙童に伏る
世路　他　夢の如く
浮名　我　弓を失う
一番　三徑の裏
秋菊　又た　空と成る

青雲の夢は　断たざれども
白髮の情に　堪えがたし
跳梁　山鬼　妬み
落莫　酒人　軽んず
色界　身　終に苦しく
無生　学　いまだ成らず

浮沼能幾許　　浮かべる沼能く　幾許なりとて
枉自覓枯栄　　自らを　枉げて　枯栄を覓めんや

（病起偶題）

これらの詩に共通して著しいものは、世に乗り出して官吏として身を立てることを厭う感情である。すでに一児の父とはいいながら、なお二十歳に満たない少年にしては、極めて消極的である。百日の病に衰えたひとに積極を求めることは無理かも知れぬ。それにしても、まだ郷試も通らぬうちから、浮生喩泡影といい、身外即浮雲といい、世路他如夢といい、浮沼能幾許　枉自覓枯栄というのは、いささか笑止と、いえなくもない。

だが、その点では、兄の伯修もまた、ありあまる才を持ちながら、進士の試につくことを厭うたいきさつは、さきにのべた通りである。

伯修が才一番の成績で進士に擢第したとき、祖母の余氏や父の七沃は、大いに喜んだであろうが、当の伯修の心には、素直に喜び切れぬものが、あったろう。祖母や父には、その感情をあらわに示すことは憚っても、弟の中郎には、かくすことはしなかったであろう。

父は、おのれの望みで得られなかった理想の実現を、子に託するつもりだが、子は心ずしも父の理想をおのれの理想とするわけではない。世の親と子の間につねにくりかえされる齟齬が、袁氏の一家にも訪れていたように、推察される。親には子の心情は全く理解しがたいものとして映る。子にも、初めからおのれの理想的な生活形態がはっきり見出されているわけではない。ただ、親の望む生活形態か、おのれに適合しないものだ、との予感が、漠然とおのれの心情を染めている

のを意識するのである。

子が親の気持をかえりみない主我的な人間ならば、一時的には家庭の不和をまねいても、やがては、子はおのれに適合した生活を見出し、親もまた、子の快適のうちに、おのれの幸福を見出すようになるものだ。だから、若いうちに、「不孝者」とののしられる人間が、つねに親を不幸に陥れるものとはかぎらない。

子が親の気持を無視することができないような性格の持主であるときには、結局　おのれの理想を抑圧しても、親の希望する姿におのれをはめこんでゆこうとする。

伯修も、中郎も　祖母や父が　衰えかけた袁氏の家を支えるために、いかに苦労と仇いて来たかを、それからまた、姻系の叔父少溪に対していかに気がねして来たかを、幼いころから、いやというほど見せつけられている。余氏にとってはその孫が、七沢にとってはその子が、官途に栄える日をこそ、ただ一つの生き甲斐として、苦苦を忍んで来たことは、伯修も中郎も、痛切に知っている。ふたりが叔父少溪のような主我的な人間ならば、祖母と父との希望を無視することもできたろう。ふたりは、放蕩に一生を費したあの少溪にさえ遠慮しつづけた七沢の子であり、余氏の孫であった。

中郎の病中の諸作には、一種の機智が顔をのぞかせる。この機智は、魯迅や周作人の打油詩の機智と似通ったところがある。彼の詩は、後にはいよいよこの機智がのさばって、評家から「軽薄」とのそしりをこうむることになる。けれども、中郎のように聰明な人間は、おのれの感傷をチばなしの感傷詩として発表することをはじらうものである。病中作の機智も　マントにすぎな

い。「残いて暇日に親しまんとして、暁風に怯ゆるを厭ハせん」これこそ、中郎の　このころの心情をいつわりなく語るものであったろう。

萬曆十五年の春を迎えて　ようやく全快した中郎は　再び受験勉強にとりかかった。この前後の数年に詩文の少いのは、舉業に専心することを余儀なくされたためであろう。

翌十六年の九月、中郎は郷試に合格した。主任の試験官は馮琦・承菴であったが、中郎の答案が きひきひとして　周　秦時代の文章を思わせるものがあるのを見て、第一に抜擢したという。

次の年の春に　第二次の試験が都で行われる。中郎は、冬に入ると　早々に　北京へ上っていった。

試験を受けるということは官吏への道を一歩進めることである。中郎にとっては　それは一歩遠ざかることを意味する。その成否を、他の受験生のように　単純に喜びと悲しみとをもって期待することはできなかった。とはいえ、おのれの力をためしてみようとする衝動もまた　閒適をのぞみ韜晦を欲する意志のみでは　とどめがたいものがあった。これこそ、中あるものがつねにおちいる陶冶なのである。

おのれの心情から

それにくらべ、今度の旅行が彼をそそのかすものがあった。それは、子供のころから噂に聞いていた、美しい都市北京を、おのれの目で見ることができるというよろこびであった。

彼の期待はむくいられたであろうか。万曆二十四年に、友の陶望齡石簣に与えた手紙の中で、彼はこのときのことを回想して、次のようにいう。

発に記えあり。少年にしていまだ公よりめしたもう車に上らざりしとき、燕都（北京）の壮麗なるを聞き、日夜に歎き羨みき。戊子の冬 計偕におもむかんとて京に至り、その人物前市を見しが ぬかるある塗 壓だてる土は、楚の地と甚しくは異ることなし。覚えず大いに失望せり。幾かに彰義門に入るとき すなわち私かに念えらく 「豈に京師の佳麗なること亮に爾の若きのみならんや」と。模糊のごとき街を走み尽し、八丈条の胡同を看尽して 未だ嘗のんは殆んと死せんとし、また京師をしたう想いをおこすことはあらざりき。

芳は、最初にうちやふられたのである。

五

中郎が進士の試験をうけうために上京したとき、兄の伯修はすでに庶吉士として翰林院に職を奉じ、北京住いをして数年になる。もとより、官職をおろそかにするような伯修ではないが、一旦 性命の神秘に思いをかけた人ならば、日々の職務を料理するだけで満足できるものではない。彼の求道心はさまざまな方向にさぐりをむけて、その途上で 幾人かの同志を得ていた。彼と同期の進士で儀部につとめる汪可受や、翰林院の同僚の王圖、黄雲峯、呉用賓らがそれである。彼らは、儒教のみにはとどまっていることができず、暗中を模索するように、仏教 道教の経典に

まで手を染めはじめていた。

このころ　明末の鴻儒として有名な焦侯　弱侯が、進士試験の主任試験官をしており、陽明学者として知られた瞿汝稷も北京で奉職していた。伯修らは、この二人について王学を鑽究した。

中郎が上京して　伯修の家に寄寓すると　伯修は絶好の話し相手を得たとばかり、日々、得る新しい知識を、中郎に注ぎこむ。中郎は父の命に従って受験のために出て来はしたものの、何となく索然として、おのれの生命のむかうべき方向を見定め之ない状態であったから、熱さきった田に清雨がしみこむように、伯修のことばは中郎の胸を潤した。

万曆十七年の春、中郎は進士の試験をうけたが、結果は失敗であった。

落第ということが、彼には、あまり苦にならなかった。兄の伯修も　別に、気の毒そうな顔をするわけでもない。丁度　仕事のうえのことで、公安に出張することになっているから　一緒に飯ろう、といって　むしろ久しぶりに味わえる故郷をたのしむ氣配であった。

公安に帰ると　ふたりは、茶の中道を伸間に加えて、その日々を、全く　性命の学の検討に費すのである。彼らが　最も心をひかれたのは王陽明であり、王龍溪であり　羅近溪であった。だが、これらの先儒が、いずれもとったように、袁氏兄弟の彷徨も、道家に立ち入り　仏門をうかがい　宋儒にかえる。たどってゆくうちに、何もかもわからなくなって茫然とする、ふと老がさしそめる思いがする。こうして忘れ日に徹し、日は夜につくのである。

一年ばかりたったある日、伯修が、宋儒張九成子韶と大慧禪師とが格物について論じたくだりを読んでいて　はっと思いあたることがあった。大声で中郎を呼ぶ。入って来ると、

「この張先生の　　」

と、おびせかける。中郎は、あわてて　おっかぶせるように

「あた、ちょっと待って。私にいわせてください。」

ふたりは　大笑いした。中郎も丁度、その格物論で　膝をたたいたところだったのだ。

一周を遂過した兄弟は、再び古人の語にかえって検算してみる。その過程で見出し逆人だ語に、中郎は、おのれの感想を加えて一本にまとめ、『金屑』と名づけた。中郎の最初の著述である。

性命の学に没頭する袁氏兄弟に、更にその熱をあふりたてる事件が起った。

万曆十八年の春、公安のまちに、ふらりとやって来た老人がある。ボロをまとい、魚籃をさげ、酒くさい息を吐きながら、まち中をうろつきまわり、夜は郊外の古廟や、町家の軒下てねる。きちがいじみたことというのだが　そのことばの中に、胸をつくような鋭どさの交ることがある。

この老人は、中郎が「醉叟傳」に描いた人物であり、中道が「作林紀譚」に作林叟として描く人物である。この人こそ、当時の李卓吾なのだと　近人容肇祖氏は推定する。

李卓吾の名は、伯修には、かなり親しいものとなっていた。焦弱侯のもとで王学を学んだとき弱侯はしばしばその名を口にし、ほめたたえた。弱侯をたずねて来る儒の中には、卓吾の弟子と称する者がいて、その見識は注目すべきものがあった。

兄弟はいずれも、この老人に、大きな驚異を覚えた。中でも、中郎の感動は大きかった。彼の胸の中で、もやもやしながら形とならない思いが、現に一人の人物となって眼前にあらわれ、彼

の思いよりもなお大膳にふるまっているように見えたからである。

さて、「酔史傳」や「柳林紀譚」に描かれた老人が、そのまま　当時の李卓吾の姿をうつしたものだとは、いえないであろう。後年、卓吾が『四蔵書』六十八巻を刊行したとき　焦弱侯が書いた序文に　「先生は高遠清深にして恭　筆の崇嚴なるが如く、昵近すべからず。その言を聴くに冷冷として壁土俱に響く」という。また　中道が書いた卓吾の伝[22]には、彼が掃除好きで、自分で掃いてまわるので、恐縮した弟子どもが　箒をかくしたといい　肌着類は一切によく洗って、脂ついたのを着なかったといい　しょっぱ、顔や手を洗って、まるで「水洗」だったという。淫らしい所業の姿とは一致しがたいように思われる。

としまれ　中郎と卓吾との交渉が、萬曆十八年、けすでにあったことは、中郎に「得李宏甫先生書[23]」なる詩があるので明らかである。

中郎兄弟と李卓吾との最初の出会は　短い時間で終ったように推測される。それがかえって、中郎の卓吾に対する憧憬を強めたのであろう。翌十九年、卓吾が大象正集を集めて禅の提唱をしていると聞いて、矢もたてもたまらなくなり　西陵まで出かけていって、やっと出会うことができた。

独り飄然としてさまよう卓吾。猶介な狂僧に見えた。大象をひきいて叱咤する卓吾は　まこと無弱侯のことばの通り、鏡然たる高岳の恢かあった。けれども　人には近づきがたく感ぜられてあろうその高さが、中郎にはかえって好もしかった。

明けっぴろげの好意をただえて訪ねて来たこの青年に、卓吾もまた、温い感情をいだかずにはいられない。このとき　卓吾は六十五歳の老翁であり、中郎は二十四歳の青年にすぎなかったが、

ふたりの間にけだ年の交りが結ばれたのである。中郎は　さきに指人た『金屑』を卓吾に捧げた。卓吾は、これに対して　次のような詩をおくっているのである。

謝君金屑句　　君が金屑の句を誦し
敬賦亦成篇　　敬賦　亦た　成篇す
早得從君言　　早く　君が言に従うを得たらんに
不当有老苦　　老苦有らべからざりしを

中郎をかくまでいきへけた卓吾とは、いったい　どのようなひとであろうか。

六

李卓吾は、初めの名は載贄、のちに贄といい、卓吾は彼の数多い號のうち最もよく知られたものだが、他に　為吾　温陵居士、百泉居士、宏父、宏甫、思齋　龍湖叟　秀翁等の号がある。福建の晋江県の人で、明の世宗の嘉靖六年（一五二七）十月に、李白齋を父とし、徐氏を母として、生れた。徐氏は彼を生むと、すぐ死去した。

七歳のころ、父から読み書きを教わり、十二歳のころ「老農老圃論」なる文章をつくって「白南公　子あり」とうたわれたものであった。

嘉靖三十一年　二十六歳で福建鄉試に合格、三十四年、長男を死なせ　三十五年、三十歳で河

南輝県教諭となり、三十九年、三十四歳のとき南京國子監に職を奉じたが、父の喪にあって帰郷した。当時　生れ故郷の泰州は、倭寇にあって荒廃し、ほとんど自活もむつかしいほどだったが、どうにか三年の服喪を終え、四十二年　家を北京に移した。十ヵ月たってやっと國子監に缺員ができ　もとの官職にもどった。まもなく祖父竹軒の訃に接し、また次男を病死させ　辛身故郷して服喪した。その留守中、飢饉のため二女三女が相ついで死んだ。

嘉靖四十五年、四十歳になった卓吾は　國子監での職よりもなおひくい礼部司務にうつった。家事のため久しく斉していた學問に専心するため、ことさらに閑職を求めたのである。

この年　友人に誘われて　王畿　龍溪の著述を読んでみる気になった。彼は、これまで　道士、僧侶　道学者ほど嫌いなものはなかったのである。そんな連中は、無用の長物だと考えていた。ところが道学の門に入ってみると、思いもかけない風光を見出した。彼がつねに心に抱いていた世界が、そこに展開しているのであった。彼は、龍溪の門から直ちに陽明の堂に進んでいった。

礼部で四五年つとめたのち　南京の刑部に転任した。ここで焦弱侯と相知った。卓吾の王学は三四の道連れをもったとはいうものの、その把握は、独学に得たものといってよい。生母の愛をうけることのなかった幼時のかなしみ　官吏登用試験の形式主義、ワイロの横行する官界　重視と俗宦にくるしめられながら土地にかじりついて苦々とはたらく農民、臣連隊　新興宗教　疑問四十年のあいだ、書生として、下級官吏として、貧しい生活を通じて　じかに見聞きして　疑問に思ったことを　公案としておのれにあたえ、それを自らの霊性に照して解決しようとしたのである。彼は　おのれの方法に対してためらうことはなかった。けれども　焦弱侯と渇い得たこと

によって　彼は　おのれの進む方向を　王学の座標に照すことができたのである。焦弱侯は、そのようなひとであった。

南京で暮す間に　王龍溪には再度、羅近溪には一度、会うことができた。また　隆慶六年には耿定理と空との交わりもひらけた。空は、その兄耿定向と共に陽明学者として知られていた。卓吾の女婿の荘純夫が、かねてから師事していたのである。

万暦五年、卓吾は五十一歳で、南京刑部郎から　雲南姚安府の知府に栄転した。

守となりて、法令清簡、言わずして治まる。毎に御藍に至りて公事を判了す。堂室上に坐するに、或いは名僧をその間に寘き、経書陳あれば、即ちに共に玄虚を参論す。人皆なこれを怪めども、公は亦た顧りみず。祿俸の外、了に長物なし。

卓吾の知府ぶりを、袁中道は、このように描いている。治績は大いに上ったのである。けれども、三年の任期が満ちると、書類を整理し、府庫を封して、侍御の劉維に辞表を出した。侍御はことはをつくして慰留したが、卓吾は、鄖定山に入って　出ようとしなかった。

この辞任に際して、人々のおくったことはをあつめた『高尚册』に、焦弱侯が加えた書後は、卓吾の人となりをよく傳えているように思われる。

宏甫の人となりは、一銭の入るをも妄りにせず　しかも千金をもって人に与うること草芥の

ごときあり、一飯の恩にも亦た報ゆるに、しかも人に千金を与えて、言に謝せらるれば　則ちこれを恥するあり、一切の喜ぶべき人を見ては　その心に當さることあるも、必ず己に合わせしめざることなし。己は酒をよくせざるに、しかも酒のむ人を喜び、己は詩をよくせざるに　しかも詩人を喜び　己は文をよくせざるに、しかも文人を喜び、己は言をすみやかにする能わざるに、しかも能言の人を喜び、己は駿馬を使とせざるに　しかも駿馬を喜び、己は弄を好まざるに　しかも能道を喜び、己は闘を好まざるに、喜んで古戦場を徘徊し、己は殺を好まざるに、しかも商君　呉起　韓非の書を喜び　己は紛事を愛せざるに、しかも郭汾陽の書を窮め欲を極めいて身の国家の安危に係わるを喜び、己は貯蓄をもって自ら処ることを欲せざるに、しかも陵仲子を喜ぶ。三公を辞して人の為に園にみず流ぎ　独だ　林を選り糟に漏い　終日百拜すること侫佞のごときをもって恭しとなす者を喜ばず。故を以て、常に世俗に喜ばれず。俗の愛するところは　困ってこれを醜しとし　俗の憎むところは　困ってこれを求む。俗の疎んするところは　困ってこれに親しみ　俗の親しむところは　困ってこれを疎んず。時として長く貧ならんことありて　必ず己むことを得ずと雖も　己む。故に終身人に依倚せらるるを肯んぜず。時として暫く富まんに必ず己むべしと雖も、己めず。故にその身を終えて一錢の積なし。平生いまだ嘗て客を召かず。人これを酒に召けば則ち赴く。平生尚人を礼せず　肯人これに飽れば則ち受く。故をもって　人に憎ばれすと雖も　終に害せられず。宏甫と世と争うことなきをもっての故なり。独り三科を設けて世を変し　最も超意を得たり。上士を見れば則ち誇りてこれを輝し　その我を知らんことを望い、中士

を見れば　横ーてこれを蔵し　もってその自ら知らんことを待ち、下士を見ては　則ち時として発くも　後には謹しんてこれを用す。その知らずして恣まままに談論せんことの益なきを知ればなり。ここをもってその身を終え　交益天下に遠きに　宏再を知る者なし。

徹底的な天の邪鬼とも、また大自在の人とも、ひとはさまざまに見る。当時、おいてたけではない。三百五十年後の今日　なお評価の定まらぬ　乱世の保物である。

七

焦弱侯の描く卓吾の人となりは、卒然としてこれを眺めるときには、単なる天の邪鬼とも見えよう。だが　実はそうではない。

孟子は、孔子の説を拡充して、人の性は善なりといった。人の本性が善ならば　その善なる性を蔽わぬことによって、人はその挙止に善でありうるわけである。すなわち、世智にならわぬ童心より発するところのものは、善でなければならぬ。童心には喜もあり、怒もあり　哀もあり　楽もある。世人はしばしば、哀と楽とを善とし、怒と哀とを悪とするけれども　哀、怒、哀　楽ともに童心より発したところのものは、善であろう。哀ぶべきに哀び、怒るべきに怒り、哀しむべきに哀しみ、楽しむべきに楽しむことは、善でなければならぬ。世人がしばしば哀楽を忘げ、

怒哀をおとしめるのは、怒哀をあらわすことは社交上不利であり、哀楽をよそおうことは有利であるからに他ならぬ、すなわち世人の智は、実は利害にもとずく虚偽の妄見である。世人もまたその妄見なることに全く盲目であるわけではない。ただ、人は、妄を捨てんがためにも、利を失うことはねがわないものである。

児童は、利害と哀怒哀楽とをテンビンにかけた上でその挙止を決めようとはせぬが　生長するにつれて利害を知って　哀怒哀楽の表現を蔽うようになる

卓吾は、この遮蔽を去って、童心のまことにかえるべきことを強調し、実行しようとしたのである。卓吾の人となりが天の邪鬼と見えるのは、利害に遮蔽束縛せられて世俗の智見に陥った眼をもってするからにすぎない。卓吾は逆世外道をてらうものではない。ただ　世に逆らっても童心のまことを失うまいとしたのである。

卓吾が『水滸傳』や『西廂記』を愛読したばかりでなく、これに評点まで加えたのは、これらのフィクションの中に、士君子の詩文には見られぬ童心の発露を見ぬいていたからであろう。

王陽明の良知の説をすでに知っていた中郎兄弟には　卓吾の説は何の苦もなく浸み透ったことであろう。中郎が、萬歴二十年、李子髯に答えた詩の中で、「當代　文字無し。閑巷に真の詩あり。却って一壺の酒を沽い、君を携えて竹枝を問かん」と歌っているのは、卓吾の童心説を背景においてはじめて味わえば、極めて自然である。

さて　この年の三月に、中郎は進士に登第した。

祖母の余氏のよろこびは大変なものであった。
一袁氏の家は　二代つづいて主婦が早死にしたから　わたしは家のやりくりに追いまわされてしらくたくたになってしまったが、お天道さまは何もかもお見通し。さきには、家道が、今日は兄道が　こうして道士になってくれたのだから　わたしはいつお浄土におまいりしても、お祖父さまに、ちゃんとこあいさつができるよ」
なんとしたんとも、そういっては、にこにこするのだった。嫡妻丘氏の鎖いしもとに堪えてきた甲斐があったわけである。
中郎は、道士には登第したが、官吏となることをせず、そのまま　また兄伯修と共に暮らしてきた。

歸来兄弟對門居　　帰り来って　兄弟　門を対して居み
石浦河辺小結廬　　石浦河辺に　小やかに廬を結びぬ
可比維摩方丈地　　維摩が方丈の地に比すべきも
不妨揚子一牀書　　揚子が一牀の書を妨げず
蔬園有處皆添甲　　蔬園は　処として皆な甲を添うるあり
花雨無多亦溢渠　　花雨は　多きも亦た渠に溢るるなし
野服科頭常歌首　　野服　科頭　常に首を歌むるに
阮家礼法向来疎　　阮家の礼法　向来　疎なり

（帰来）

この詩にうたうように、石浦のほとりの小庵に分居し、兄弟と、冀春所　同性学　性長をまじえて　日々王学を研鑽したのである。

兄弟で　同じ学問に共鳴する人とはいえ、おのおの面貌を異にするように、その考え方も一様ではない。

いずれは世間の人に交わらねばならぬ。世間に処しなければならぬ。そのときは鋭鋒をおさえて風に折とやわらかくうけなかし　おのれの身は、石柱をたたく慎重さで持ってゆくがいい。

これが　伯牧の考え方だった。

鳳凰や麒麟は　駑馬とはいっしょにいないものだ。馬鹿な奴はほっておいて　すぐれた人間はおのれの欲するままに、どんどんとやればいいのだ。世間の奴らの鼻息をうかがって　へいこらお辞儀をしなければならないようなことは、ごめんだな。

中郎の行き方は　こうだった。

李卓吾は　二人を批評して　「伯牧は　実　仲牧は　英特」といったというが、その的確には驚くべきものがある。

注

1　思水巻一「袁中郎先生傳」（以下「伝」と略称）に「庚戌辛巳十三」とする。庚戌は萬曆三十

八年（二〇）だから　四十三年を逆算すると隆慶二年となる。

2　「丁酉十二月初六初度」岡本の『広陵集』巻一三、詩題。

3　「公之生也母余夢月入懐故小字月」憲本「伝」巻一。岡本の巻首にかかげる「袁中郎伝」は『公安県志』から引いたものだが　憲本の「伝」と内容　文章ともに　ほとんど同じである。たたこの部分は　岡本の方は「余」の一字がない。余は中郎の祖母の姓であり、母は龔氏である。憲本「伝」の「母余」を「祖母余」の意だとするか、「余」の一字を衍文として母龔氏をとるか。議論の分れるところであろうが　宗道出生時の伝説を考慮して、本文には「祖母余氏」として文かいた。

4　「初先生降生之夜祖母于夢一美人頭自天飛來若今所畫天人菩薩之飾瓔絡交垂以襁承之甫覺而先生生矣嘉靖庚申二月十六日也」民国二十四年初版刊の『珂雪斎近集』下、頁四四。伯脩の生日を小脩は　かく二月十六日とするが、中郎集中には、花朝の日すなわち二月十五日を「伯修初度」として祝っていう例が少くない。

5　袁中道「弟大姉五十序」『珂雪斎近集下』頁二九。

6　「答大家嬸訃銘」鍾本巻一八、巻二。「弟大姉五十序」

7　「弟大姉五十序」

8　憲本「傳」

9

10　「石浦先生伝」

11　周本『破砚斎集』巻二集七に「劉元定斎中列請社友時余有内人之感」なる詩が見える。この

詩の制作は　萬曆三十五年丁未一六〇七の七夕より中秋までの間である。中郎の書いた「祭李安人文」鍾本巻一八　葉二二　には「嗟乎二十三年形不離影今者裏適順留鄉井」という。三十五年から二十三年を遡れば　万曆十三年中郎十八歳である。周本『敝箧集』巻上葉四の「病中短歌」の「吁嗟我生年十九……贏枯博得妻子憐」もまた　中郎の結婚の十八歳の年であったことを裏書するものであろう。

12　「稲暉」は　周本　鍾本　元政本・図本　民国二十四年世界書局刊『袁中郎全集』（以下「世本」と略称）ともに「稲田」とし、憲本のみが「稲暉」とする。憲本の正しいことは　小稿の次のことばで明らかである。「園先兄微笠集中有二聖禅林検蔵詩中有稲暉裁就質身輕語今改作稲用裁就便不成語矣稲暉是袁粲亦名水田衣想是寄者之誤」（珂雪斎近集巻二「答京涯」）。

13　「化城」の譬は「化城喩品第七」に「衣下有珠」の譬は「五百弟子授記品第八」に見える。

14　鍾本巻七葉九。

15　「余大家翁墓石記」　鍾本巻一八葉三。

16　憲本「伝」。

17　鍾本巻二一葉七「弟猶記少年未上公車時聞燕都壮麗日夜歎羨及戊子之冬計偕至京見其人物街市泥塗塵土與楚地初無甚異不覚大失望幾入彰義門復私念曰豈京師之佳麗而竟若爾及走盡拱盤衛看盡八九條衢何而弟心始死不復作京師想矣」。

18　「石浦先生伝」、憲本「伝」。

19　民国二十六年上海商務印書館刊『国学小叢書』『李卓吾評伝』頁二七。

20 『河雲斎近集』下頁五九。
21 周本『嚴匡集』巻之上、葉一〇。
22 憲本「伝」。
23 『李卓吾評伝』。
24 『河雲斎近集』下、頁五八　李温陵傳「為守法令清簡不言而治每至伽藍判了公事坐堂皇上或寘名
　名僧其間薛書有隙即與参論虚玄人皆怪之公亦不顧徐俟之外了無長物。
25 『黄氏筆乘』巻二。
26 李贄『李氏焚書』巻三「童心説」
27 「乞歸稿」「告病疏」「余大家州羣墓石記」
28
29 憲本「伝」

附記

1 『方向』七　所載拙稿「瓶花 1　袁中郎私記　二 1」に対し小川環樹博士から左の示教を蒙った。記して感謝の意をあらわしたい。

……十三頁の「高き質をかけ、うることは肯んぜざりき」原文の懸高質不肯售は「高貨ヲカクルモノアルモ　アヘテウラズ」で、高貨ヲカケルのは他人であり、それに売ってはやらないのが少溪だと思います。なお瓶史序の「嗟夫此隱者之事決裂丈夫之所為」の二句は難解ですが

裂を烈に改めると一層文従義順でなくなるようです。裂を非に改めるのは簡便ですが、原意ではありますまい。「丈夫の所為に決裂す」とよめないものかと考えて見ています。ハルクニカケハナレテイルの義に決裂の二字が取れるかどうか疑わしいので　蓋闕とする外はありません

が御再考を煩わしたいところです。　」（一九五七　九・一付書翰）

2　三頁　二二頁・三〇頁の「花木」を「花竹」と訂正する。七頁八行の「せらる」を「せられる」と訂正する。一五頁六行の「た」の下に「を」を加える。一七頁一行「相若たり」を「相若たりしとする。一九頁一二行「例えば」を「例えば」とする。二三頁「嘗に乾したる」を「嘗に乾したる」とする。二七頁末行の「父兄」を「父系」と訂正する。二八頁一二行「陽明左派」を「王学左派」と訂正する。二九頁一二行「小や意に当わざれば、輒ち毀ち」を「小や意に当わざれば、輒ち毀ち」とする。三九頁「公安袁氏世系表」中　家道の配の「田氏」を削り、中道の子に「祈年」を加える。

3　桑山龍平氏は「袁中郎の文学と生活」（天理大学学報第二十四輯）に、中郎の曽祖父の名を「暎」父の名を「士瑜」としておられる。拠るところを示されないが　あるいは『公安県志』にこのような記述があるのであろうか。わたくしは未だに同県志を見ることを得ないのである。示教を得たい。

『平松集』訂正

三五百末行「聲」を「性」に訂正。三六頁一行「寺後院」を「寺後禪院」と訂正。四一頁五行の「千山」を「千年」と訂正。五三頁九行「現石白」を「現雪白」と訂正。

『方向』八　訂正

一五頁四行「pc の音の」を「pc 京の音の」と訂正。二六頁五行の「序」の字の次に「カッコを加える。同頁一〇行（七二五？―八一五）を（七二五？―八一五？）と訂正。同頁一三行「三十三」を「三十歳」と訂正。三〇頁一〇行「たぐいか」を「たぐいが」と訂正。三一頁五行「韓公」を「韓滉」と訂正。四五頁本文三行「深了」を「読了」と訂正。五三頁六行「ととまる」を「とどまる」と訂正。同頁一二行の末に阿を加える。五五頁四行「奇異の目をもって」を「本書は奇異の目をもって」と訂正。同頁一三行「中唐の詩賀」を「中唐の詩人李賀」と訂正。五七頁一行「強立な」を「強力な」と訂正。九五頁一五行「世の親と父」を「世の親と子」と訂正。九七頁九行「それは一歩」を「それはおのれの心情から一歩」と訂正。一〇八頁三行「くたくたになってしもうとが」を「くたくたになってしもうたが」と訂正。